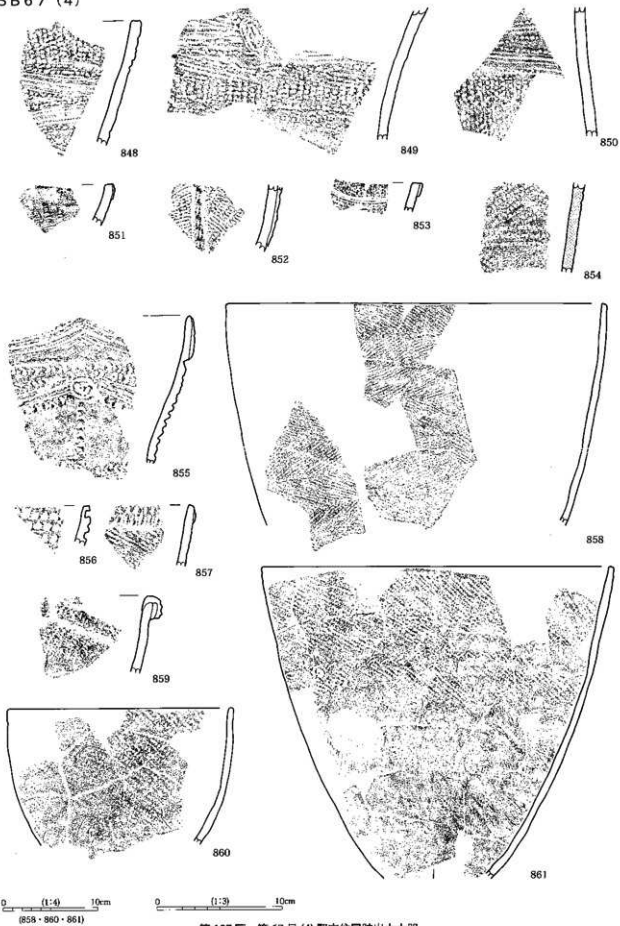
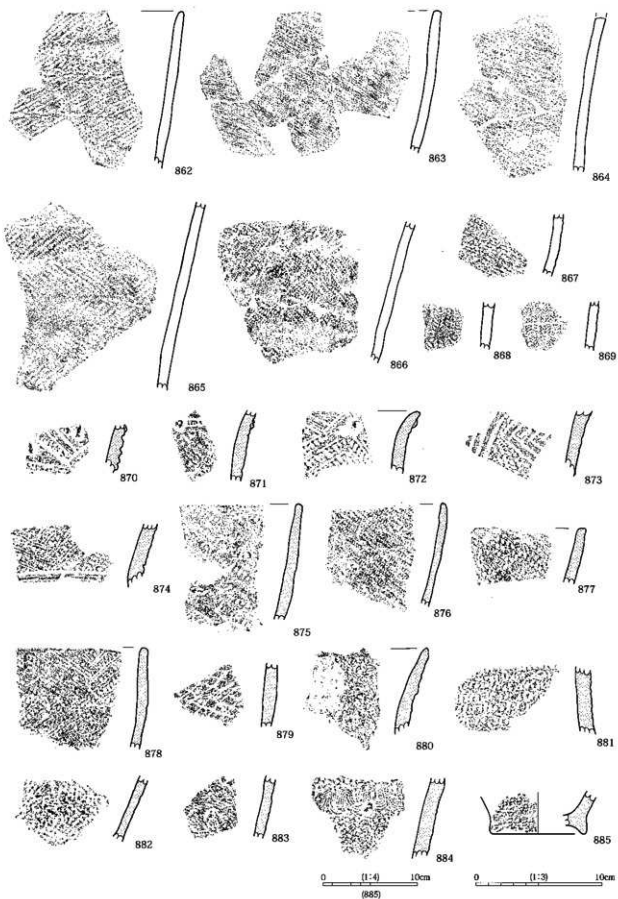


SB 67 (4)



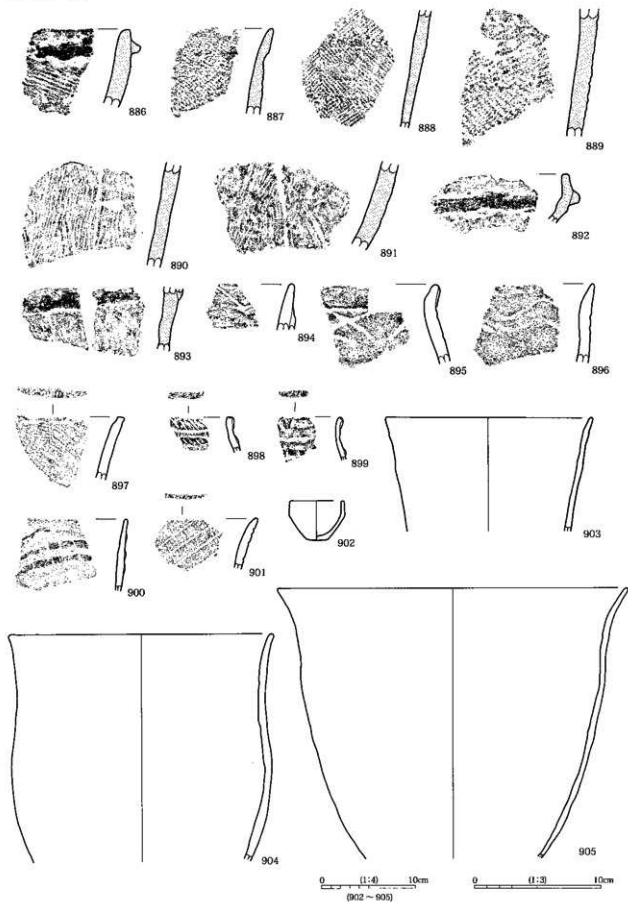
第107図 第67号(4) 聖穴住居跡出土土器

SB 67 (5)



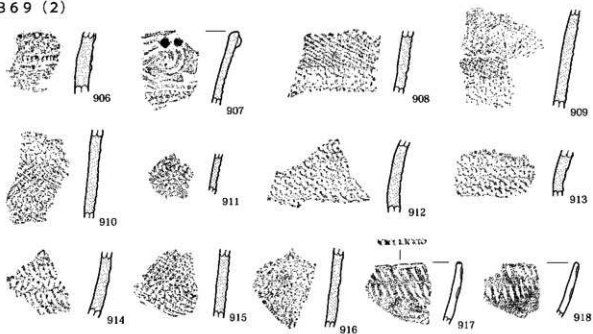
第 108 图 第 67 号 (5) 整穴住居跡出土土器

SB 69 (1)

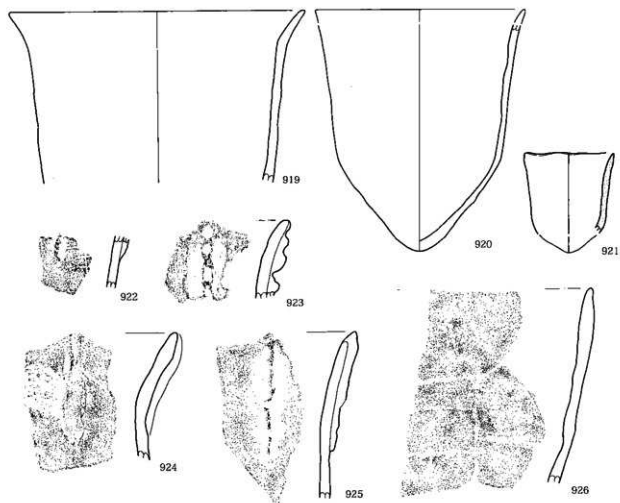


第109図 第69号(1) 竪穴住居跡出土土器

SB 69 (2)



SB 70 (1)

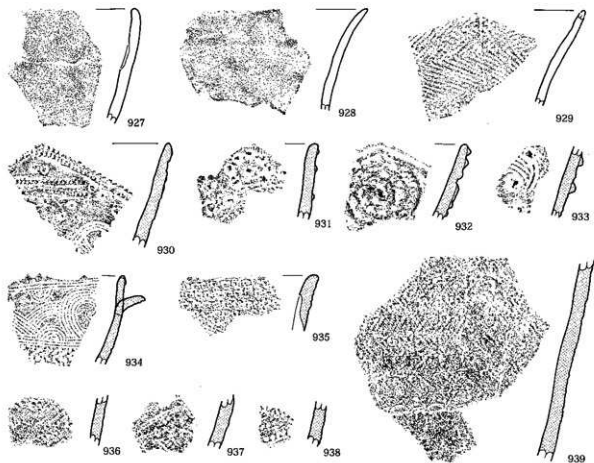


(919-921)

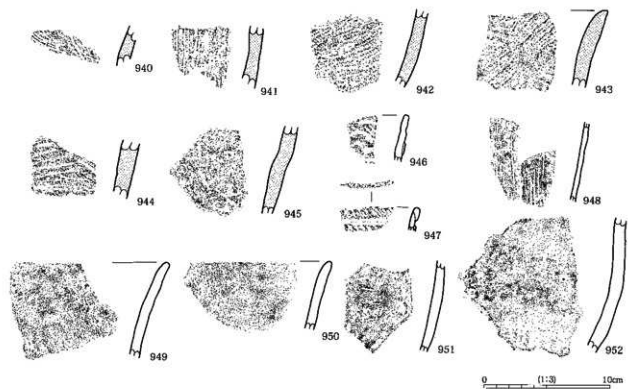
0 1:3 10cm

第 110 图 第 69 号 (2) · 70 号 (1) 整穴住居跡出土土器

SB70 (2)

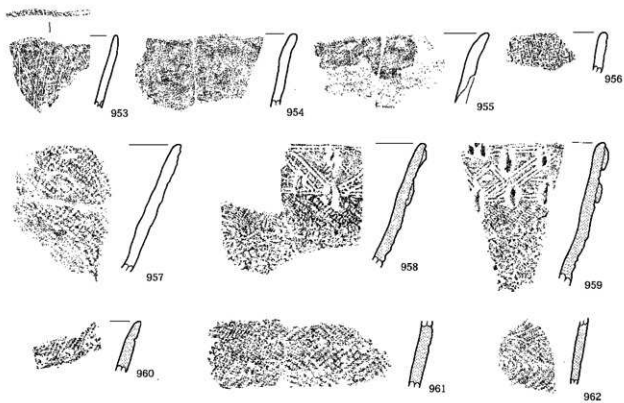


SB71

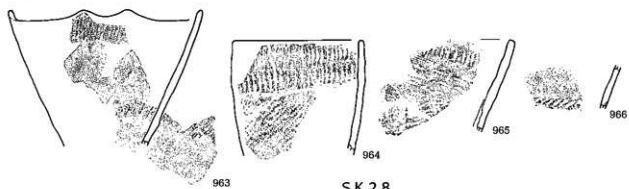


第111圖 第70号(2)・71号整穴住居跡出土土器

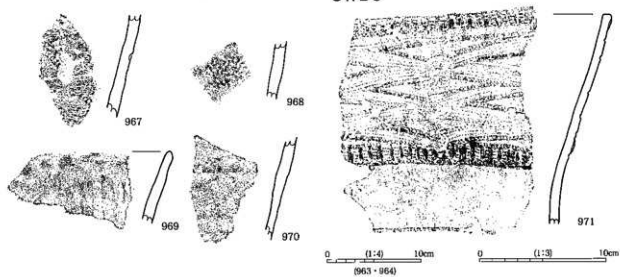
SB 73



SK 26

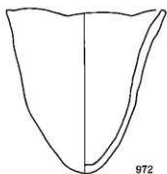


SK 28



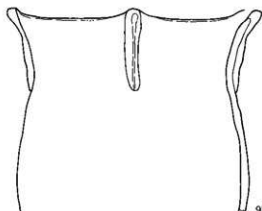
第112圖 第73号整穴住居跡、土坑(1)出土土器

SK 44



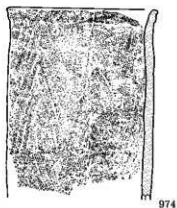
972

SK 46



973

ST 6

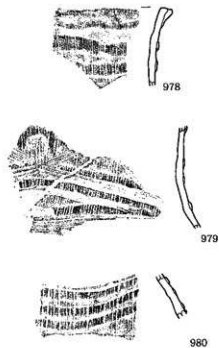


974

表採



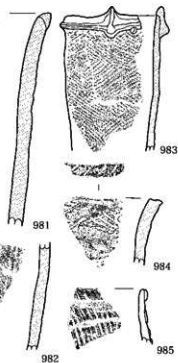
II E 11



I Q 01



I Q 07



0 (1:4) 10cm
(972 ~ 974・982・983)

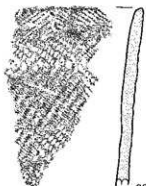
0 (1:3) 10cm

第 113 図 土坑 (2)、方形柱六列、II E11、I Q01・07 出土土器、表採土器

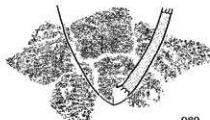
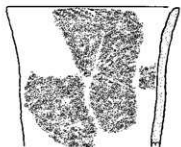
I Q 08



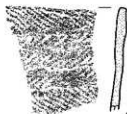
986



988



989



987

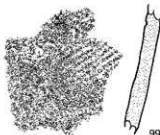
I Q 13



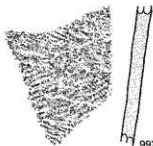
990



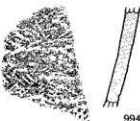
991



992



993



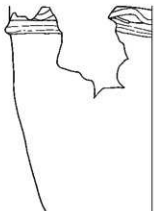
994



995



996



997



998



999



1000



1001

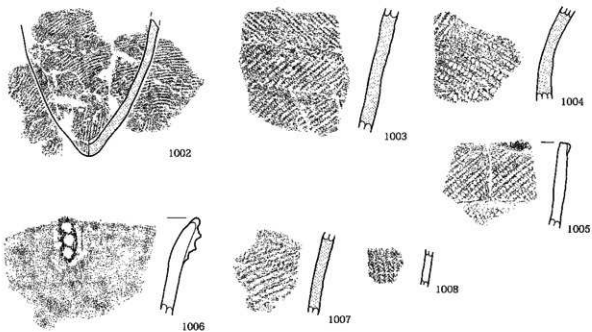
0 (1:4) 10cm

(989 - 997)

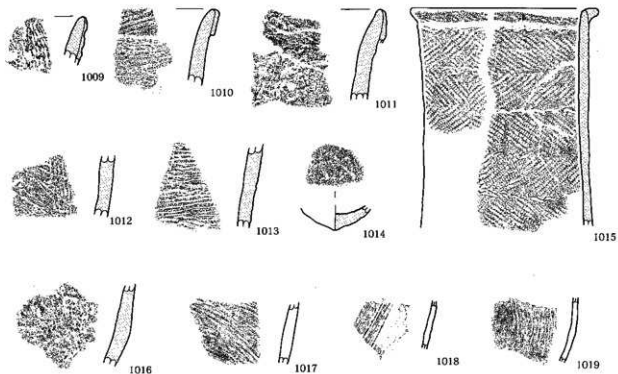
0 (1:3) 10cm

第 114 图 | Q08 · 13 出土土器

I Q 15



I Q 20 (1)

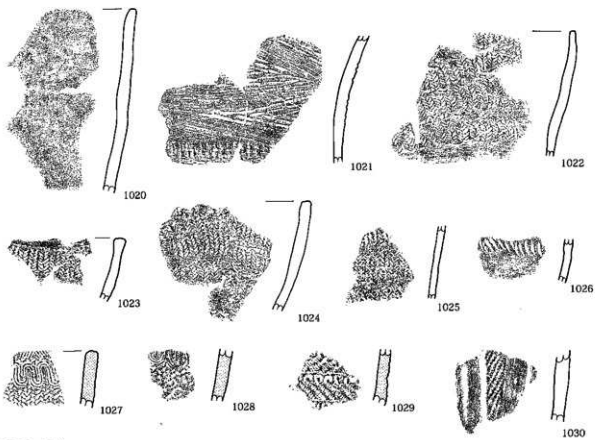


0 (1:4) 10cm
(1002・1014・1015)

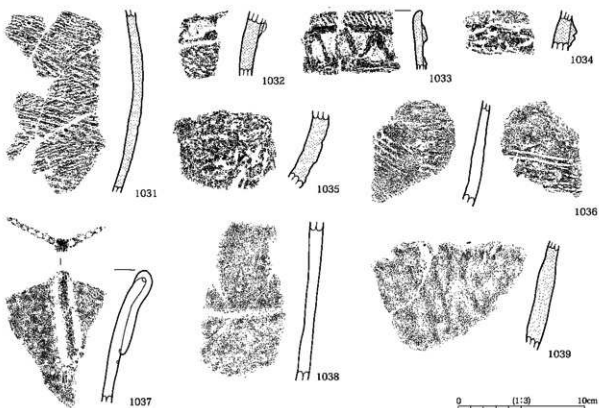
0 (1:3) 10cm

第115図 I Q 15・20(1)出土土器

I Q 20 (2)

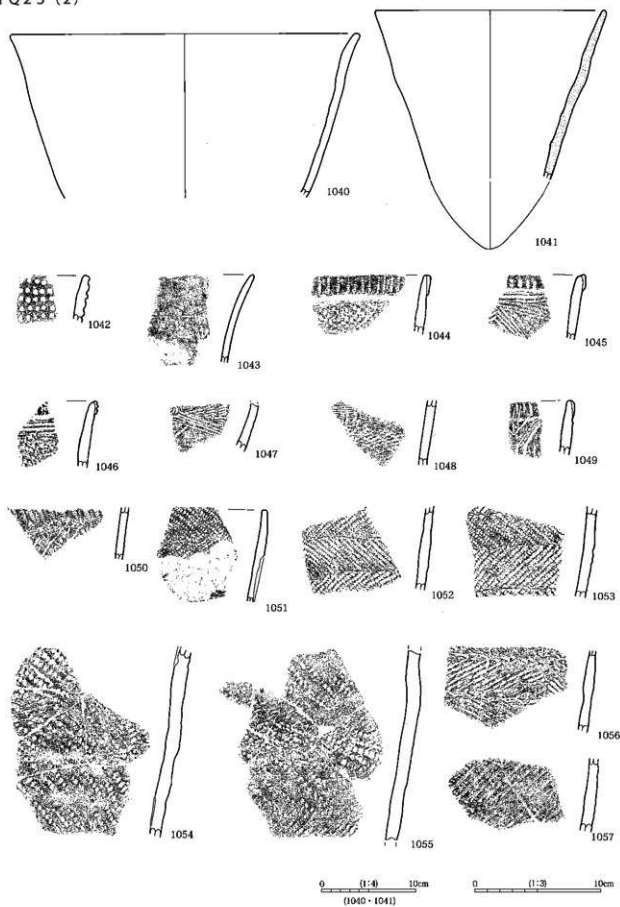


I Q 25 (1)



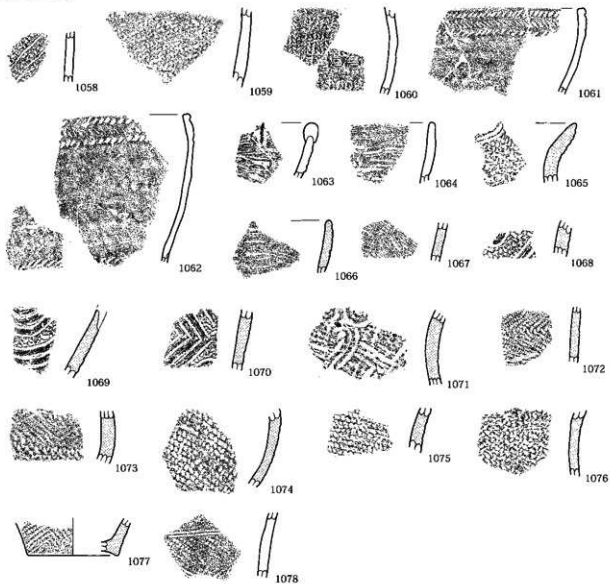
第 116 图 I Q20(2) - 25(1) 出土土器

I Q25 (2)

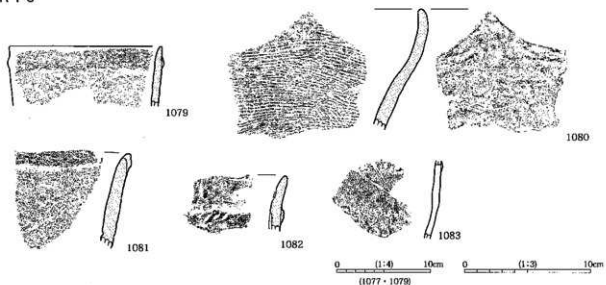


第117図 | Q25(2)出土土器

I Q25 (3)

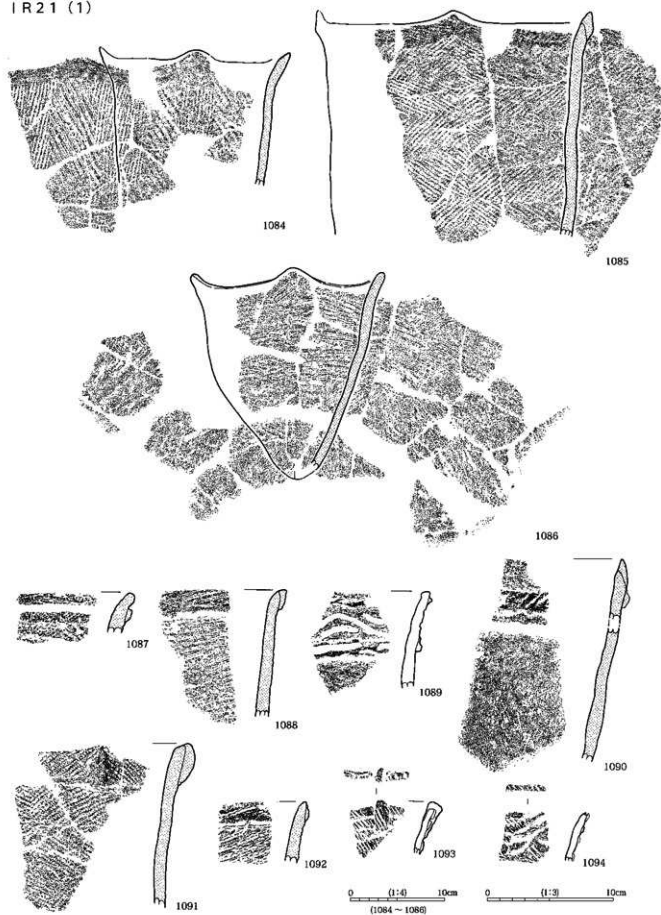


IR16



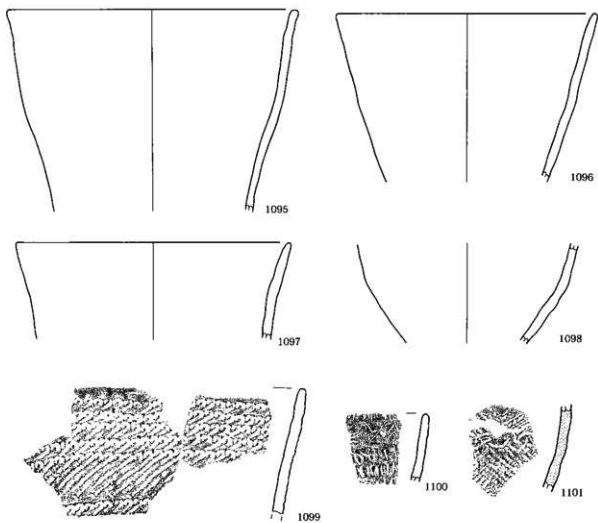
第118圖 I Q25(3)、IR16 出土土器

I R 21 (1)

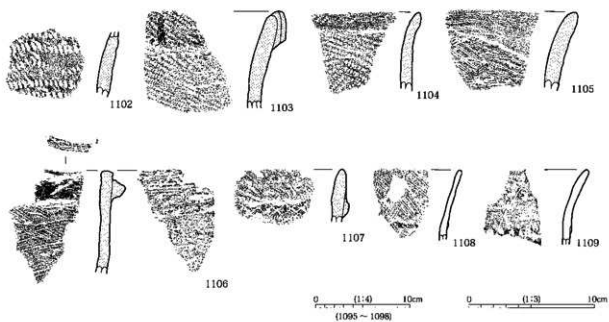


第119図 I R21(1)出土土器

I R 21 (2)

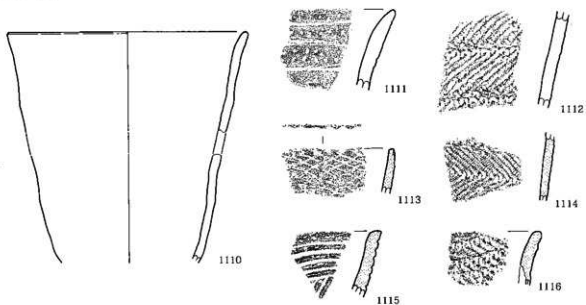


I R 22 (1)



第120圖 I R21(2)・22(1)出土土器

I R 2 2 (2)

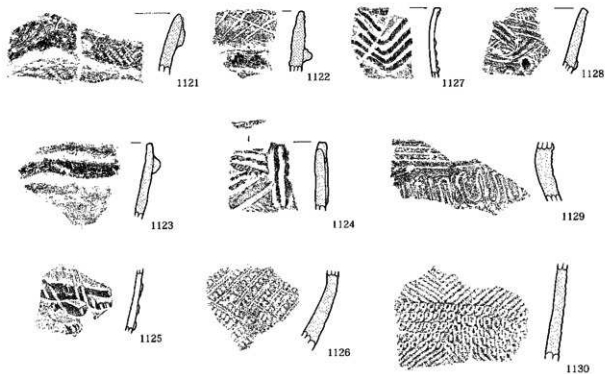


I R 2 3



I W 0 1

I W 0 2

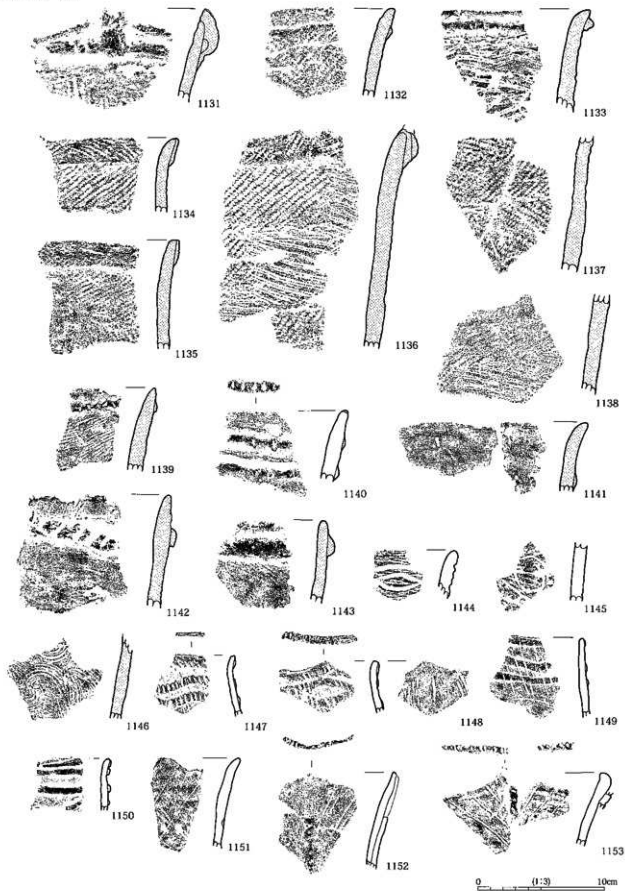


0 (1:4) 10cm
(1110)

0 (1:3) 10cm

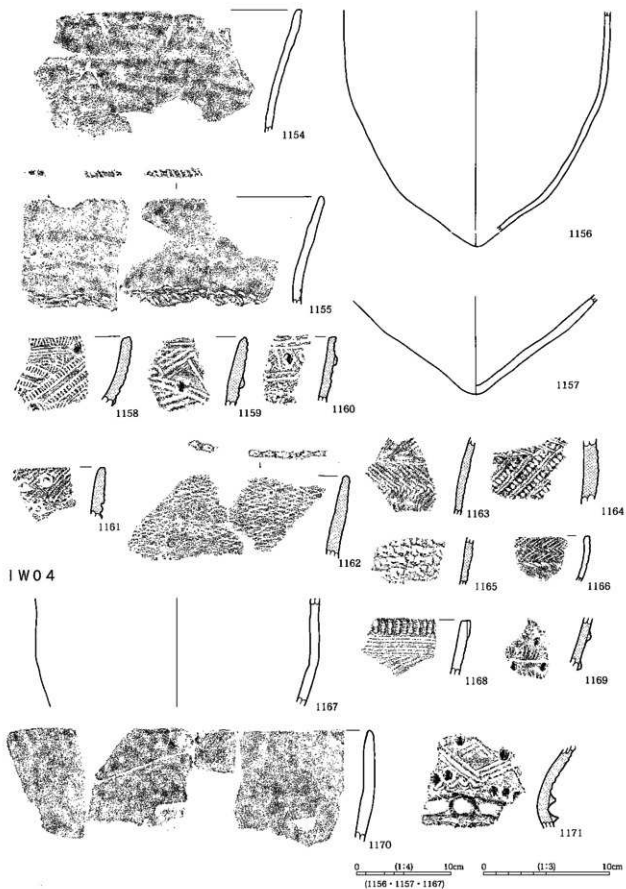
第121図 I R22(2)・23、I W01 出土土器

IW03 (1)



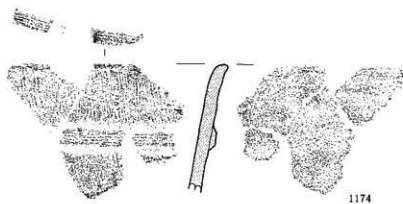
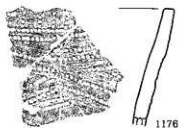
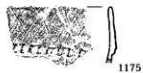
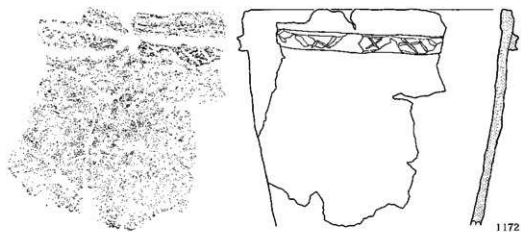
第122图 | W03(1)出土土器

I W03 (2)

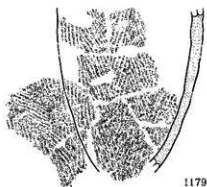
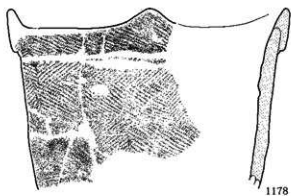


第123図 I W03(2)・04出土土器

I W07



I W08 (1)

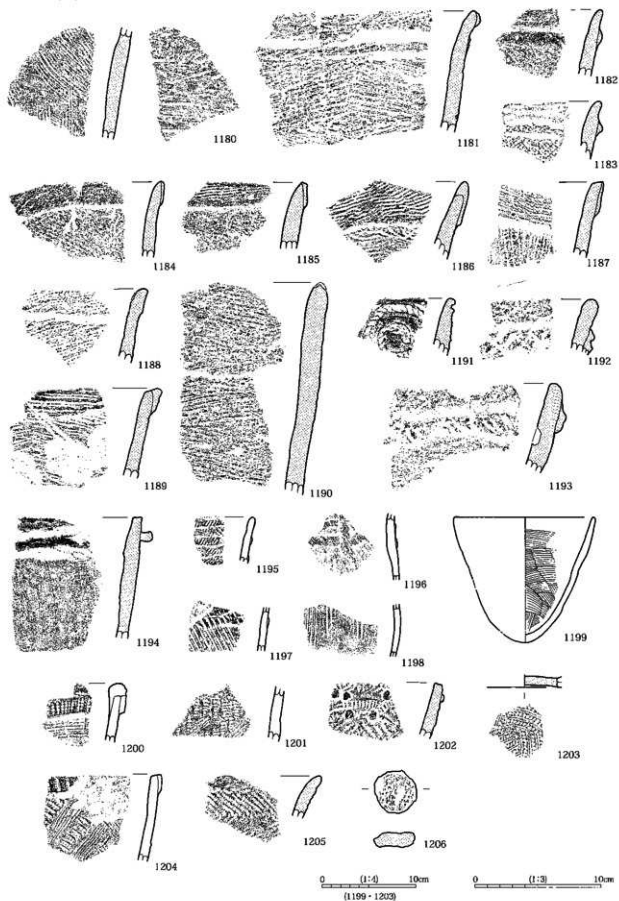


0 1:4 10cm
(1172 · 1173 · 1178 · 1179)

0 1:3 10cm

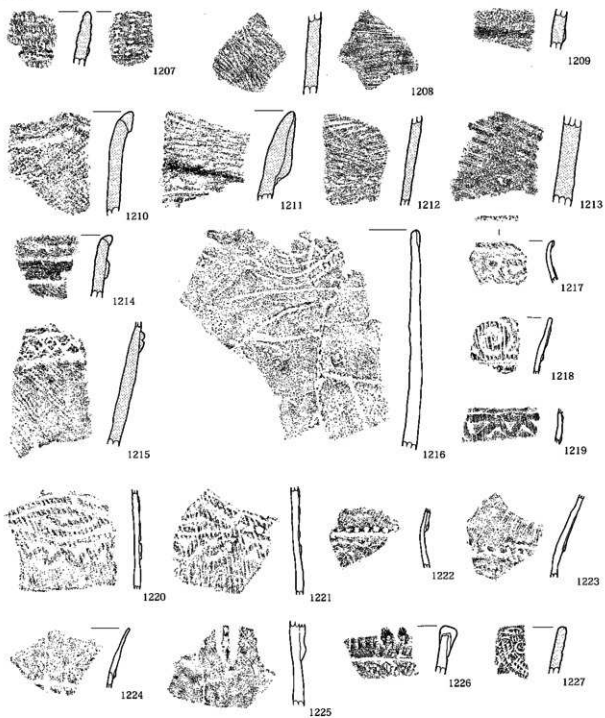
第124图 I W07·08(1)出土土器

I W08 (2)

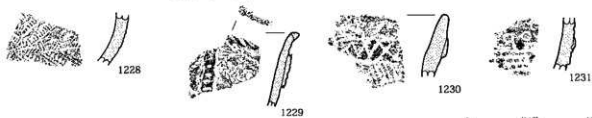


第125図 I W08(2)出土土器・土製品

IW09



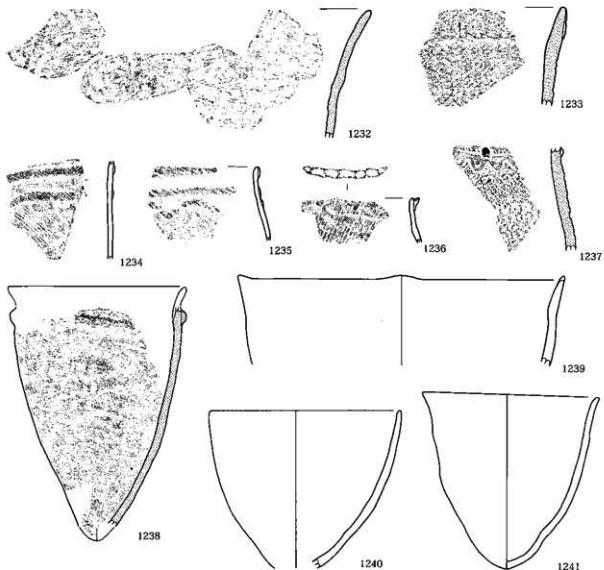
IW04·09



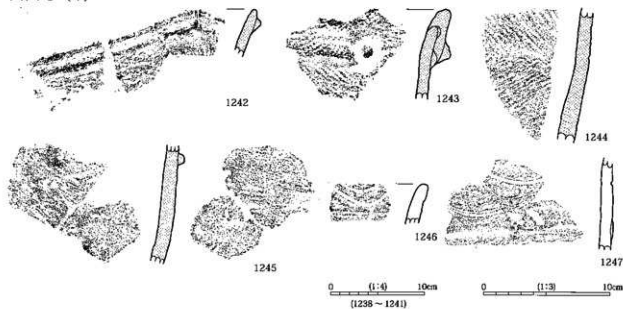
0 (1:3) 10cm

第 126 图 | W09、04·09 出土土器

I W 1 4

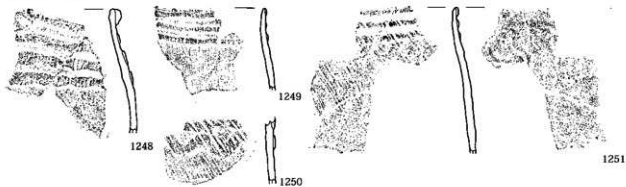


I W 1 5 (1)

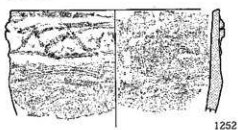


第127図 I W14・15(1)出土土器

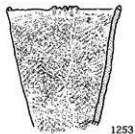
I W 15 (2)



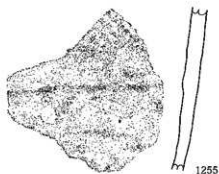
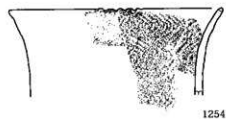
I W 16



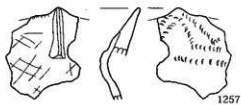
I W 19



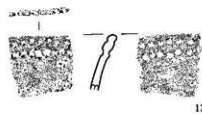
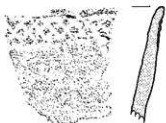
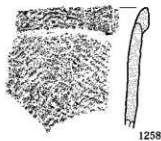
I W 20



I X 11



I X 16



I X 17



I X 21

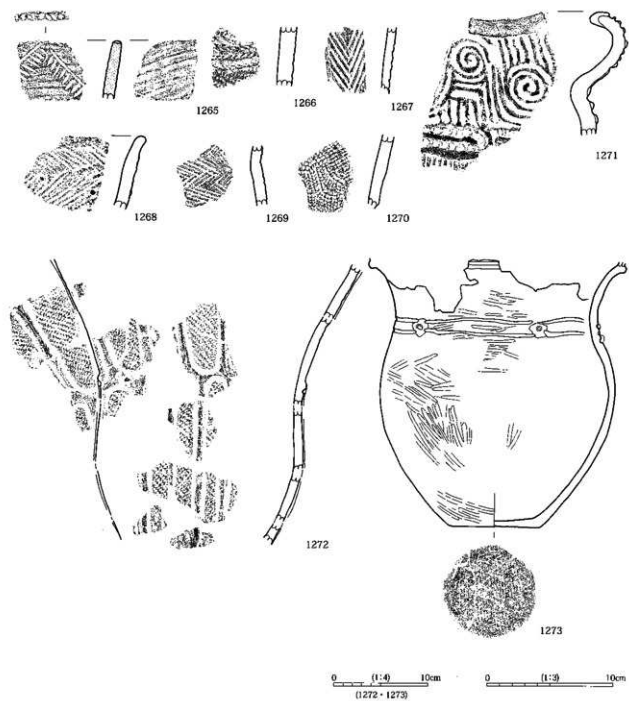


0 (1:4) 10cm
(1252 ~ 1254)

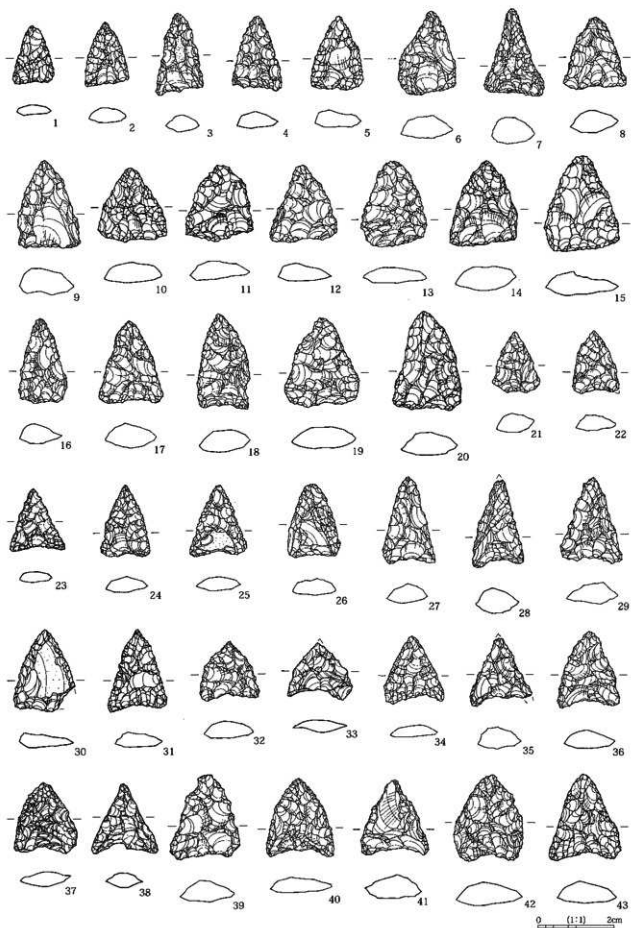
0 (1:3) 10cm

第128图 I W11 · 15(2) · 16 · 19 · 20、I X16 · 17 · 21 出土土器

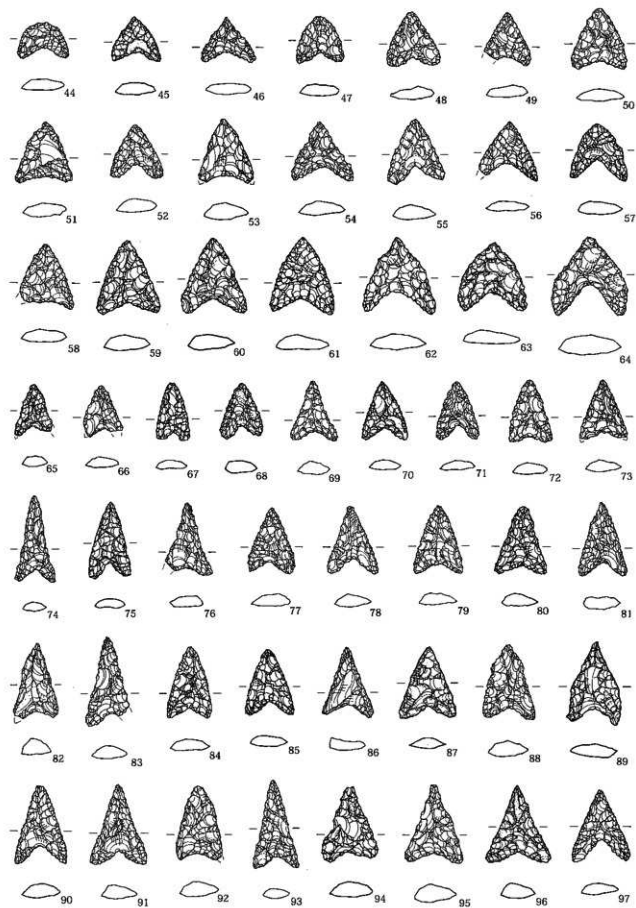
早期末葉～前期前葉以外の土器



第129図 早期末葉～前期前葉以外の土器

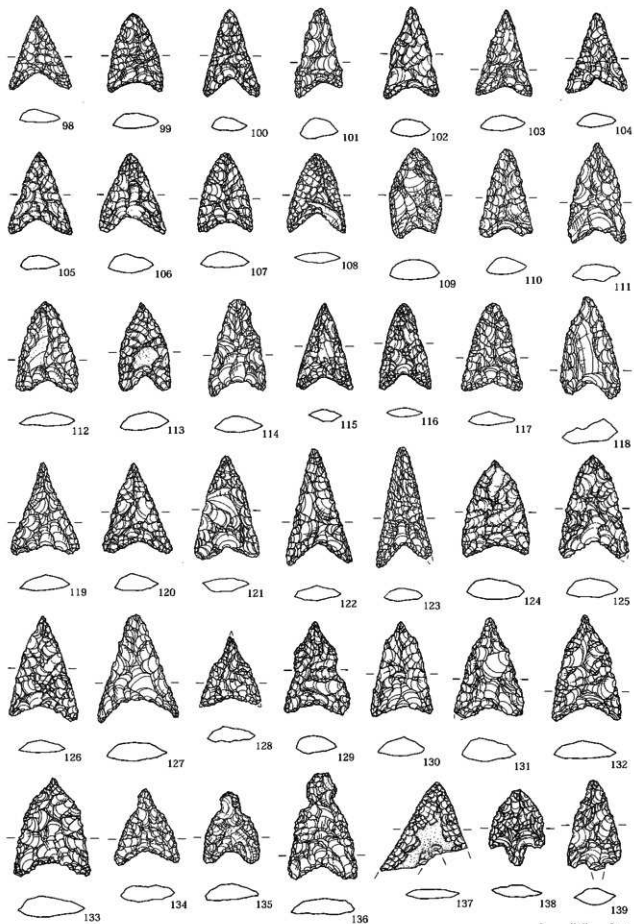


第130圖 石鏃(1)



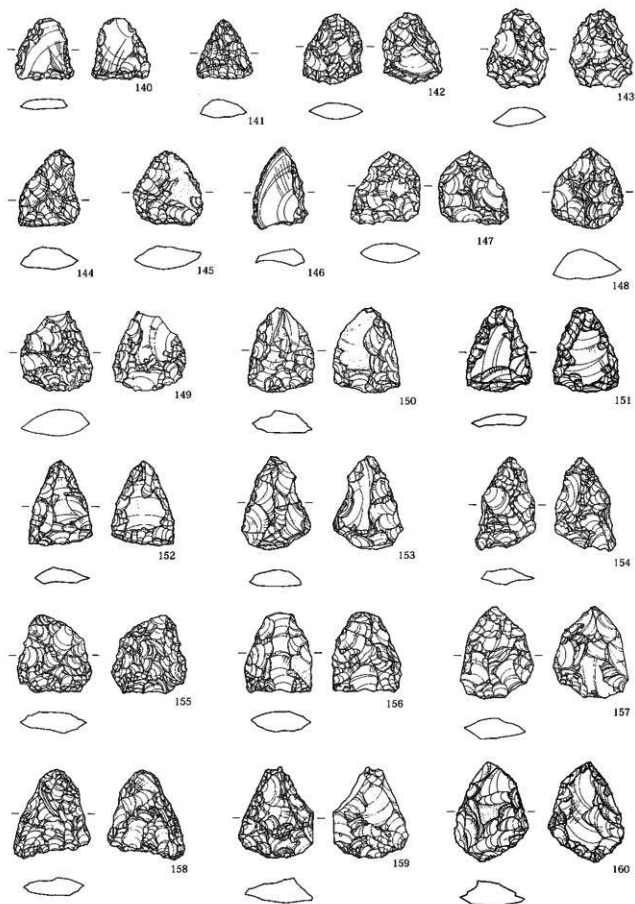
第131図 石鏃(2)

0 (1:1) 2cm

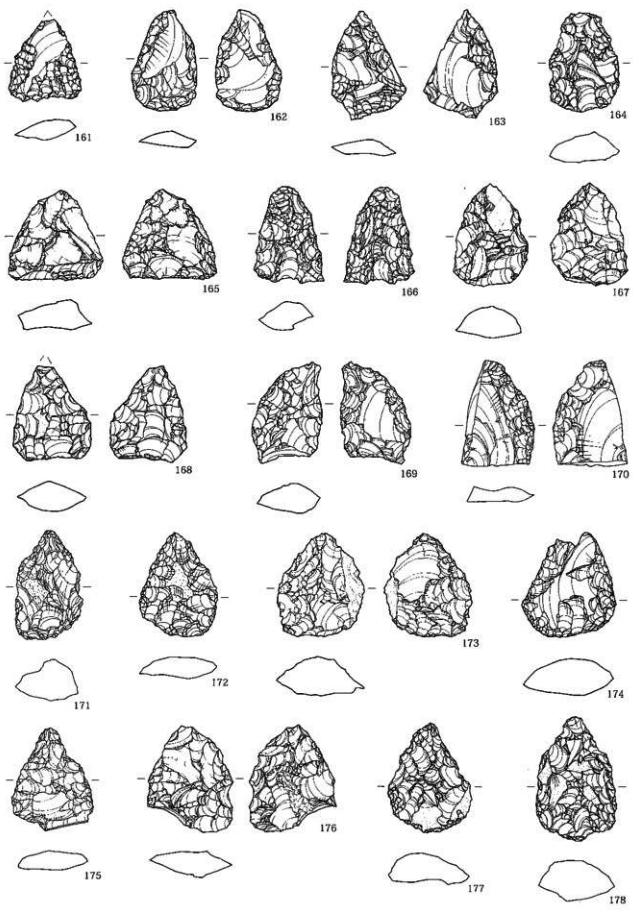


第 132 图 石箭头 (3)

0 (1:1) 2cm

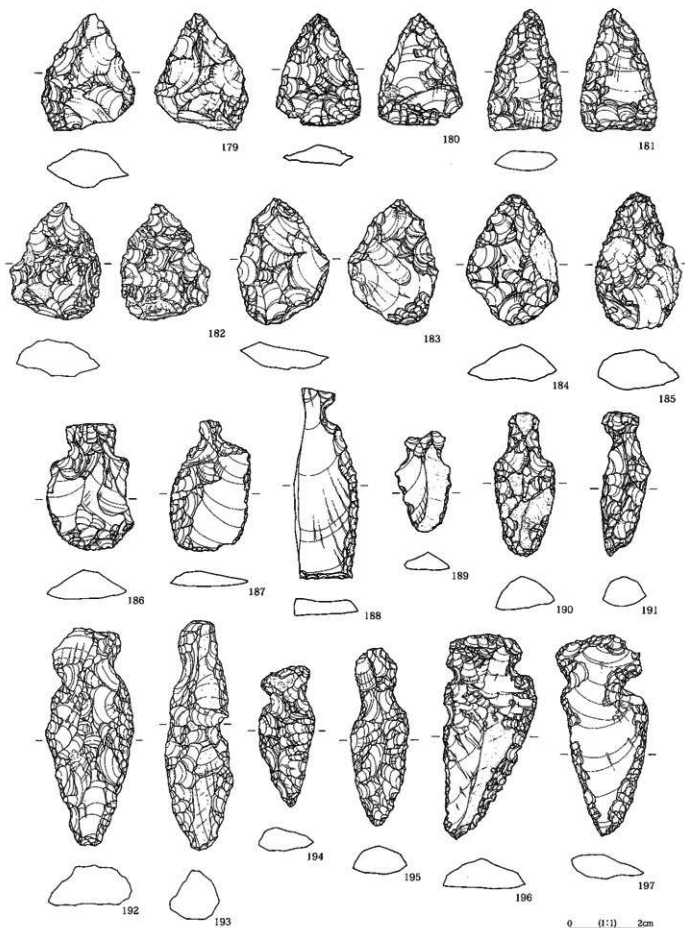


第133図 石器未製品(1)

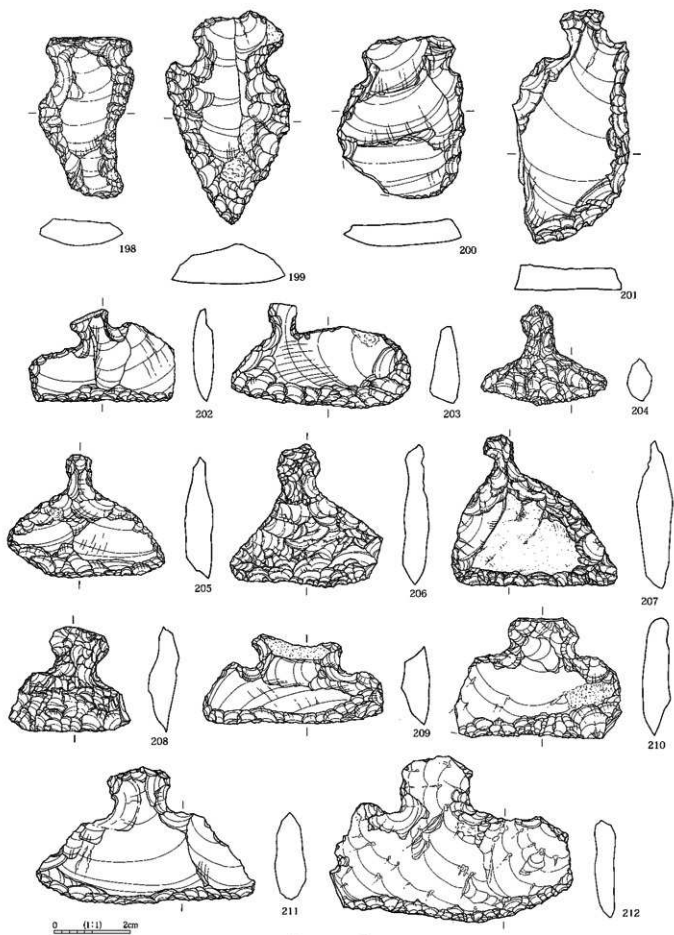


0 (1:2) 5cm

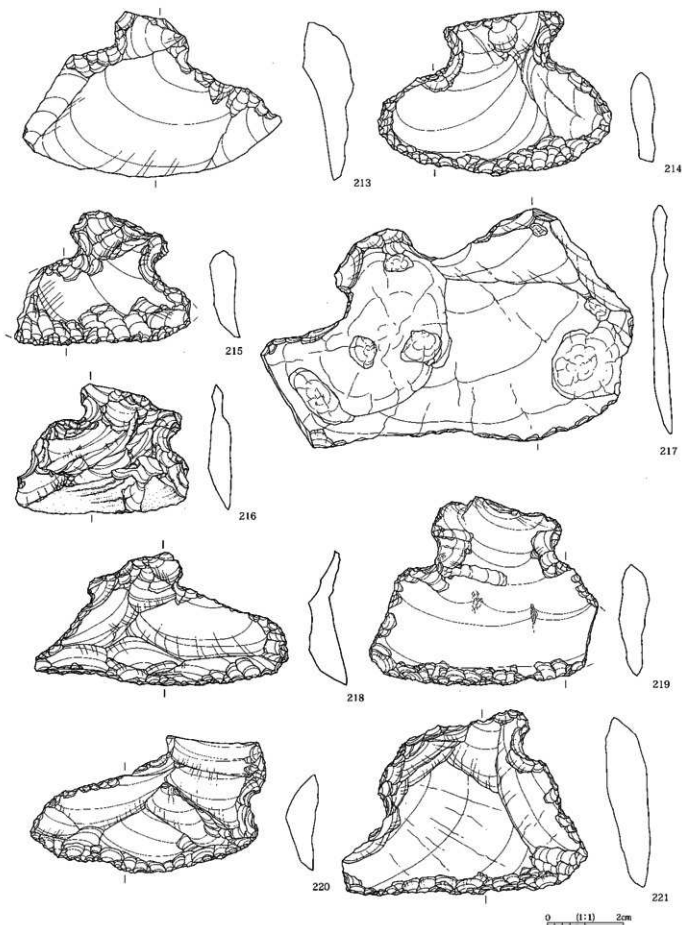
第 134 图 石鏃未製品 (2)



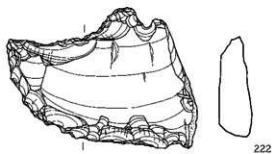
第135図 石鏃未製品(3)、石鏃(1)



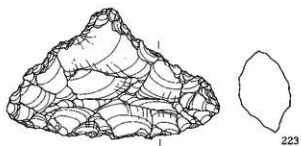
第136圖 石匙(2)



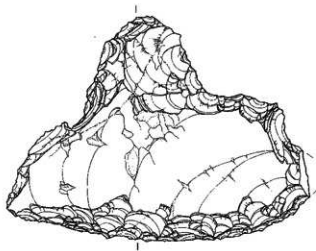
第137図 石匙(3)



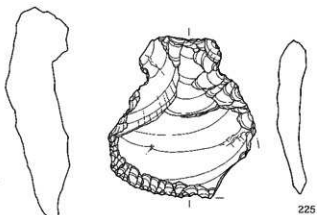
222



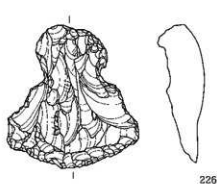
223



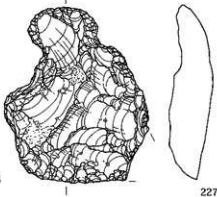
224



225



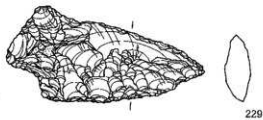
226



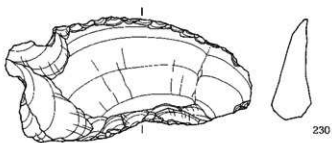
227



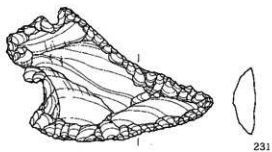
228



229



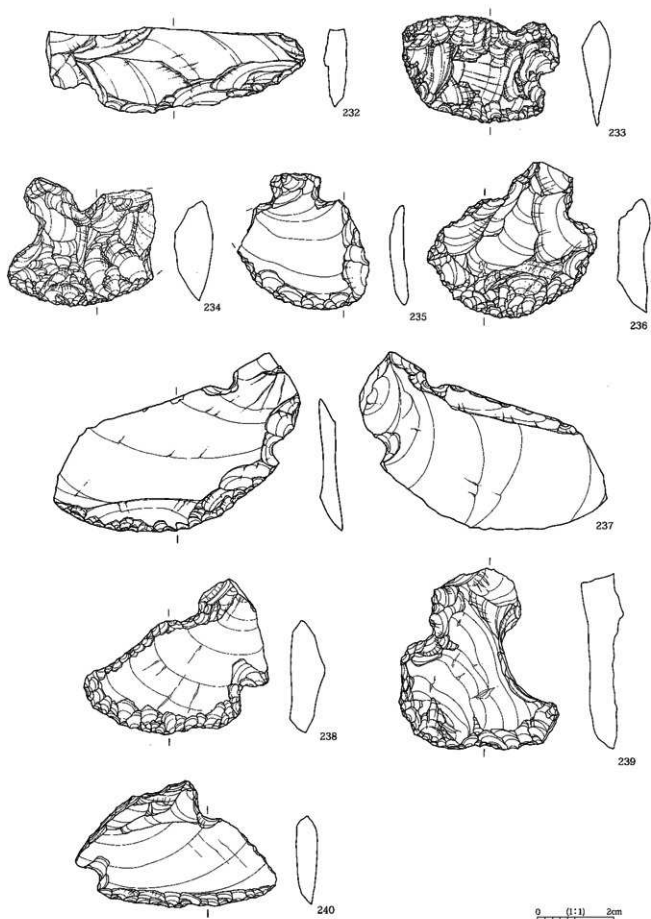
230



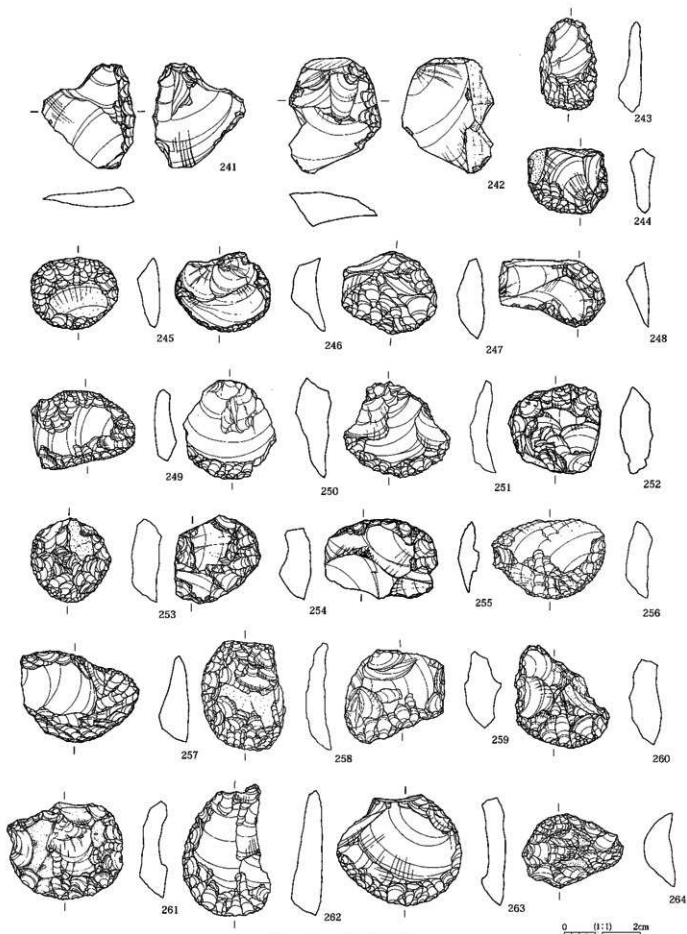
231

0 1:1 2cm

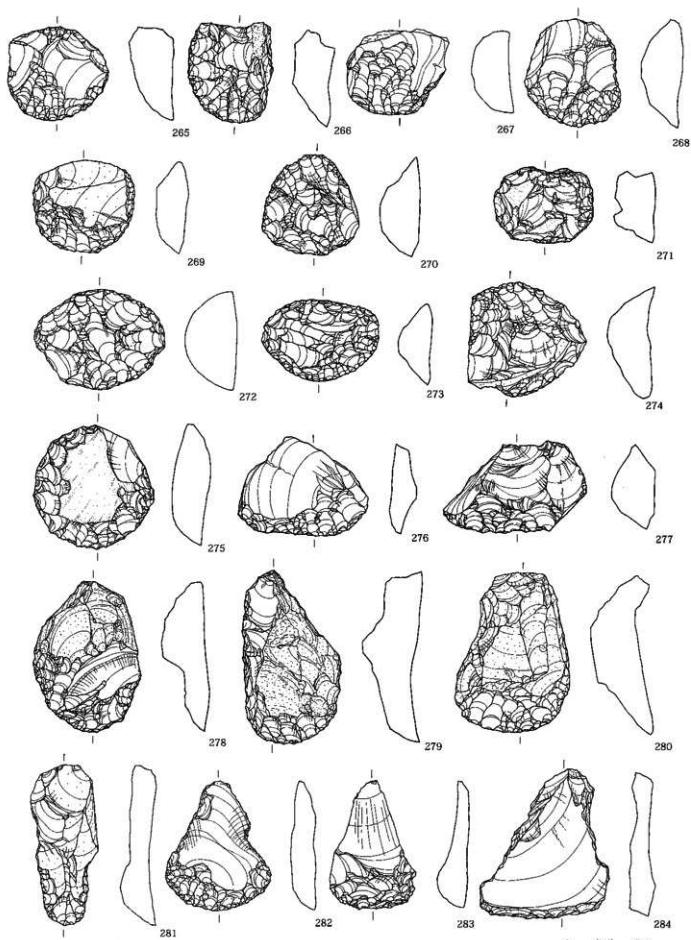
第138图 石匙(4)



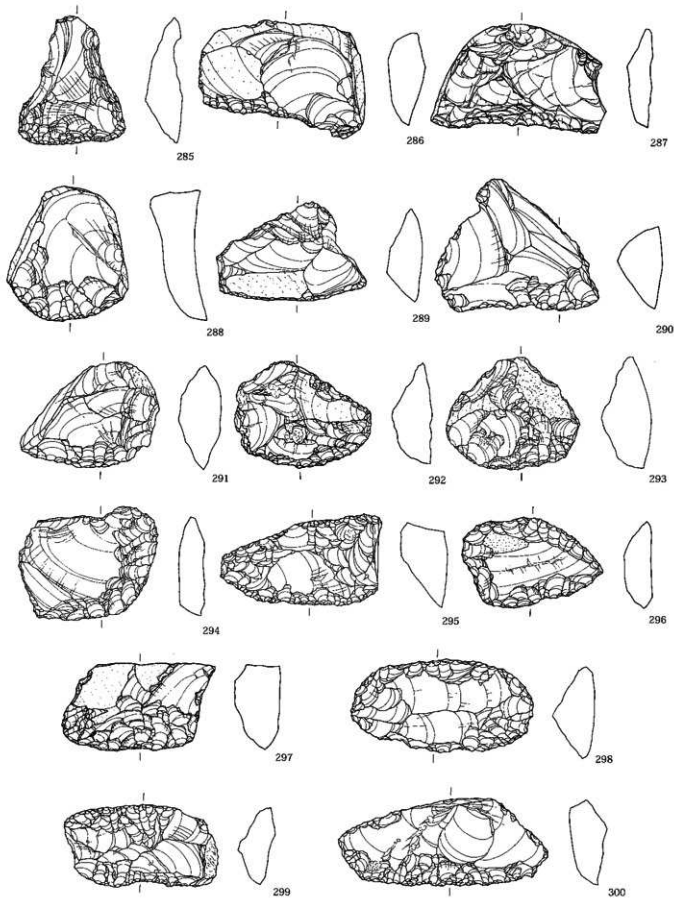
第139図 石器(5)



第140図 スクレイパー(1)

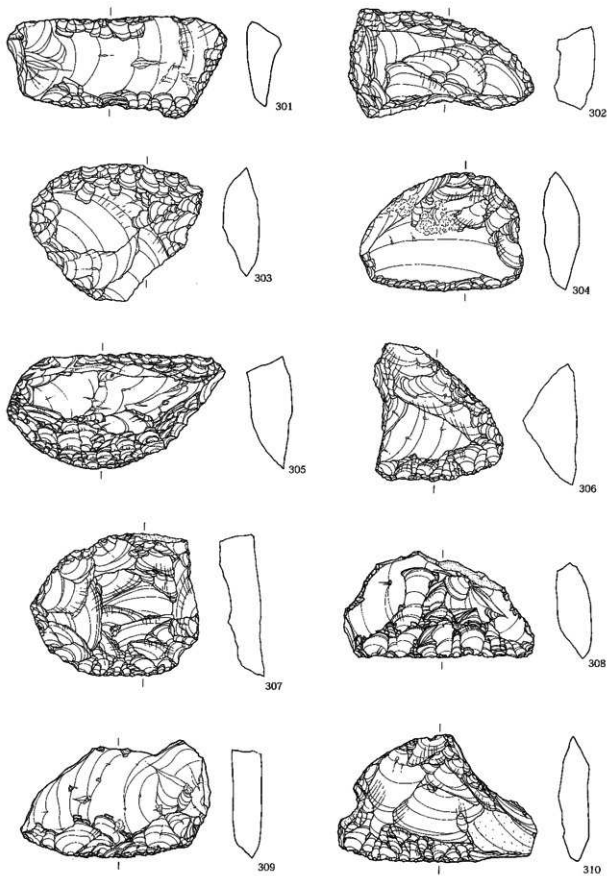


第141図 スクレイバー(2)



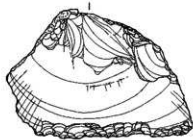
0 (1:1) 2cm

第142図 スクレイパー(3)

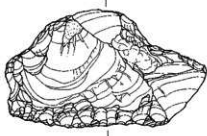


0 (1:1) 2cm

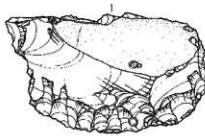
第143図 スクレイパー (4)



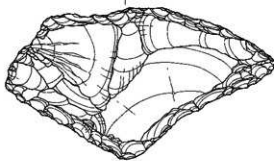
311



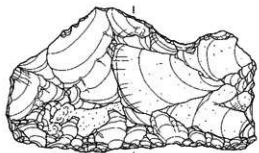
312



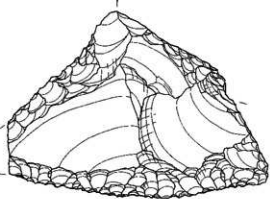
313



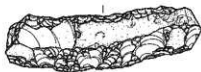
314



315



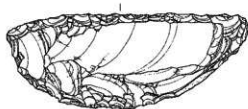
316



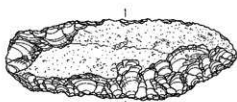
317



318



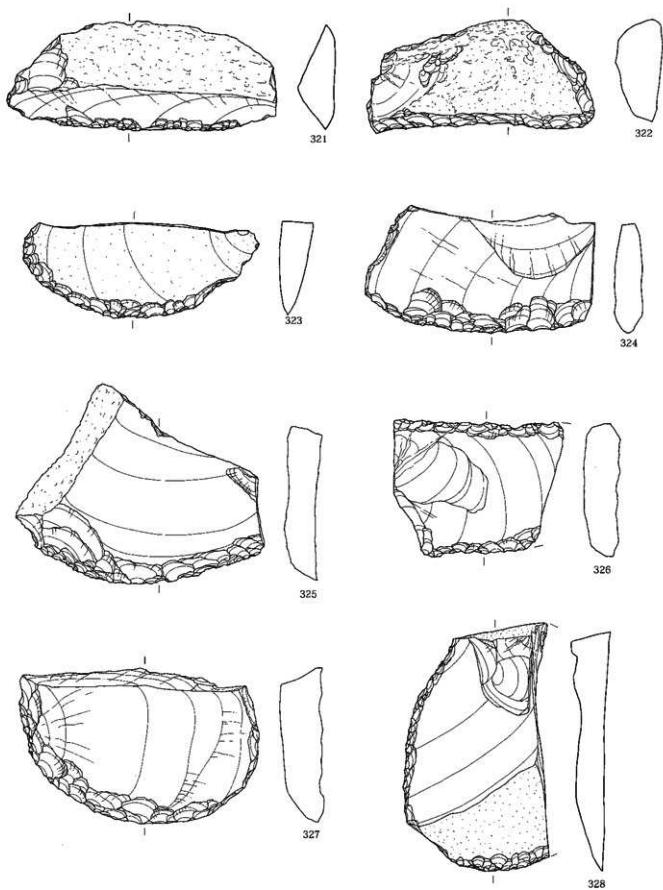
319



320

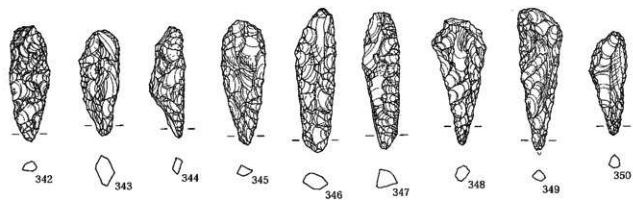
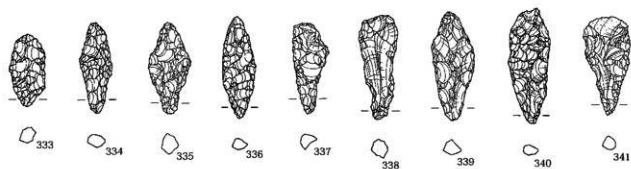
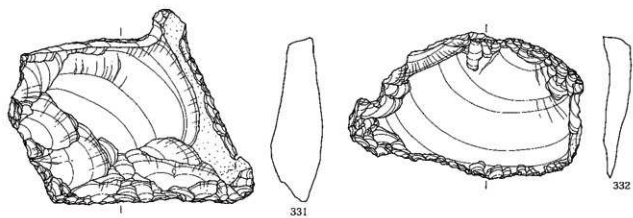
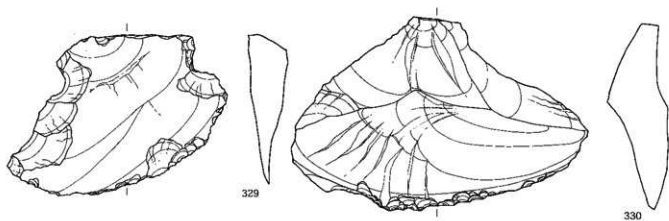
0 (1:1) 2cm

第144図 スクレイパー(5)



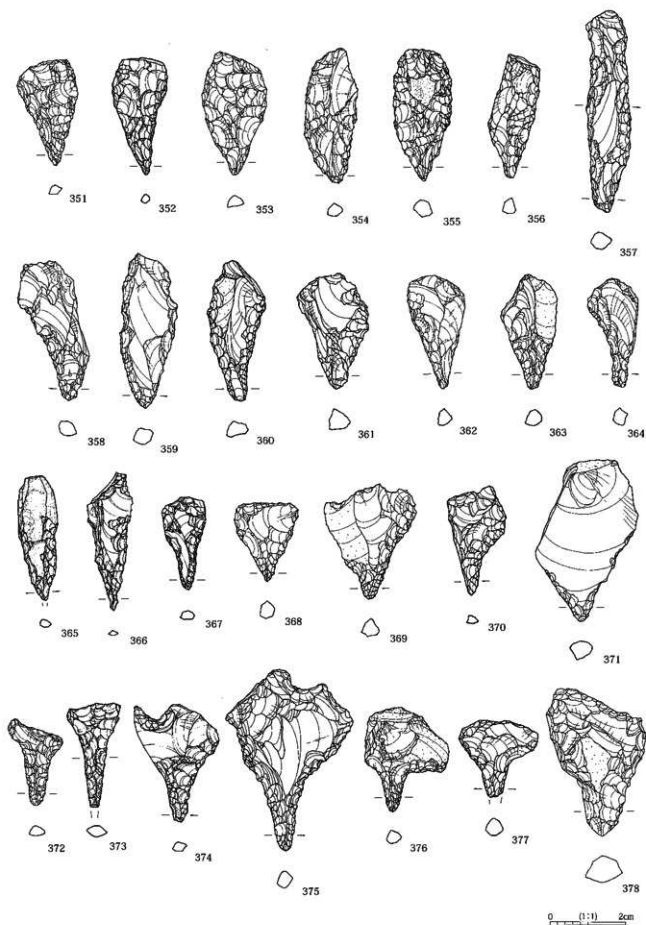
0 (1:1) 2cm

第145図 スクレイバー(6)

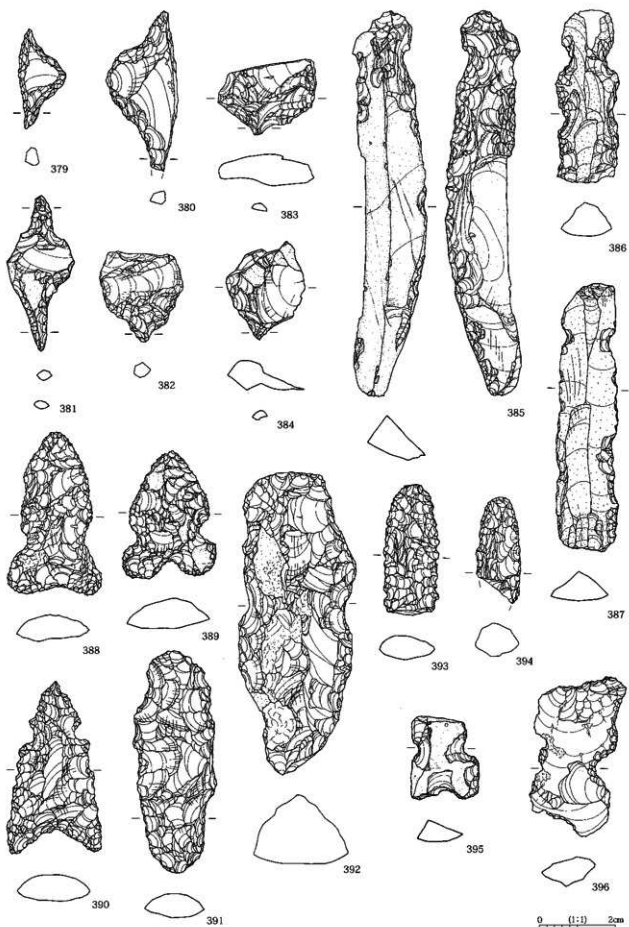


0 (1:1) 2cm

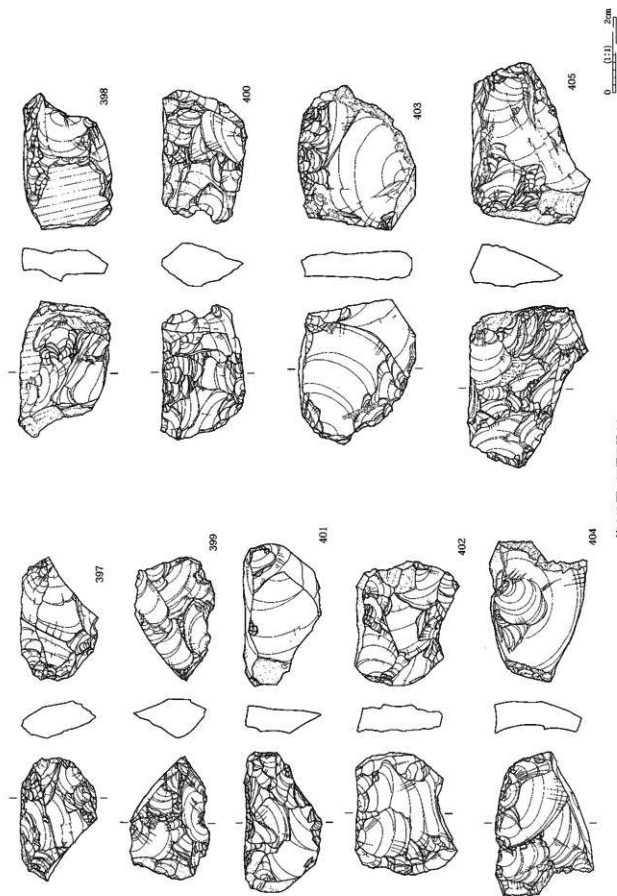
第146図 スクレイパー(7)、石錐(1)



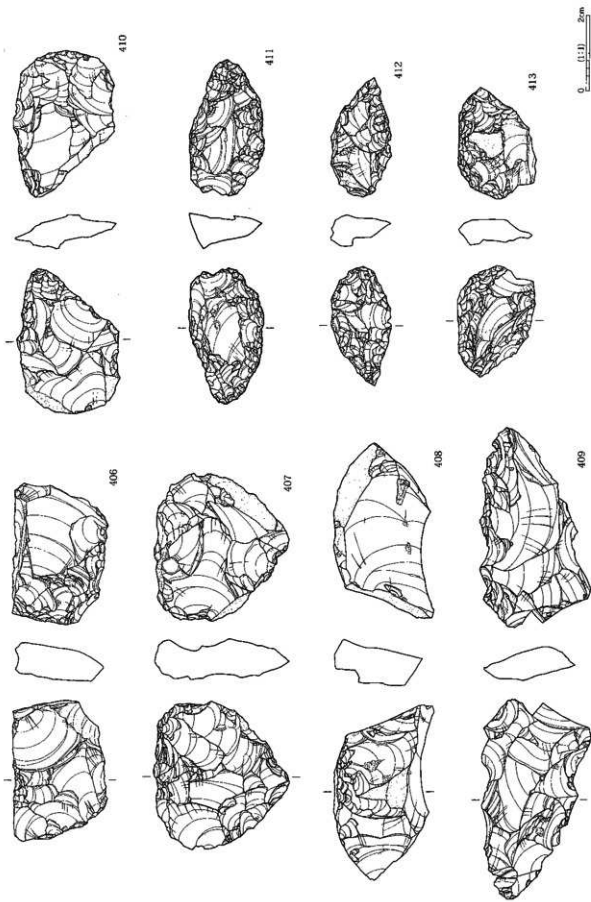
第147図 石鏃(2)



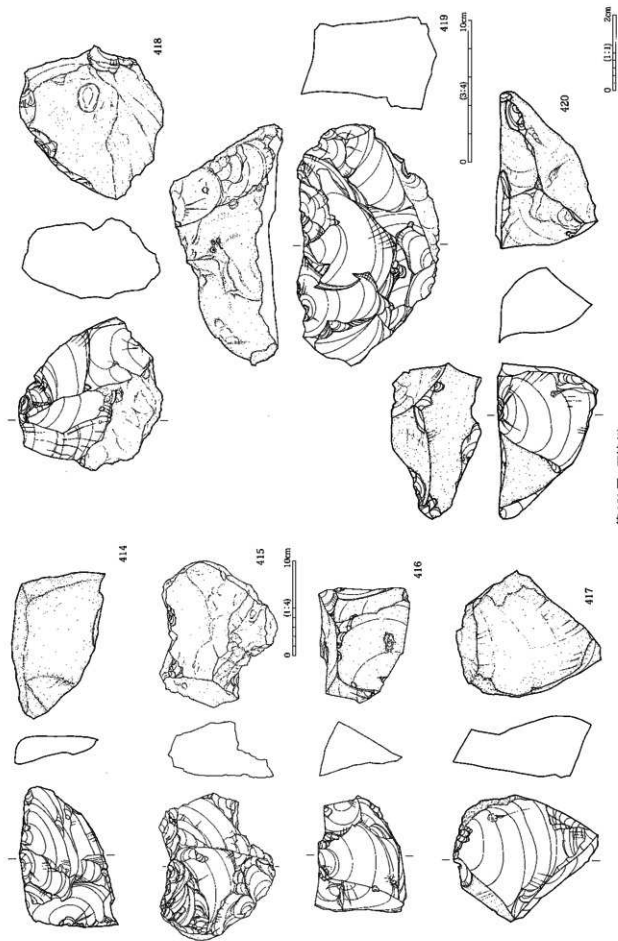
第 148 圖 石錘 (3)、器種不明、挾入石器



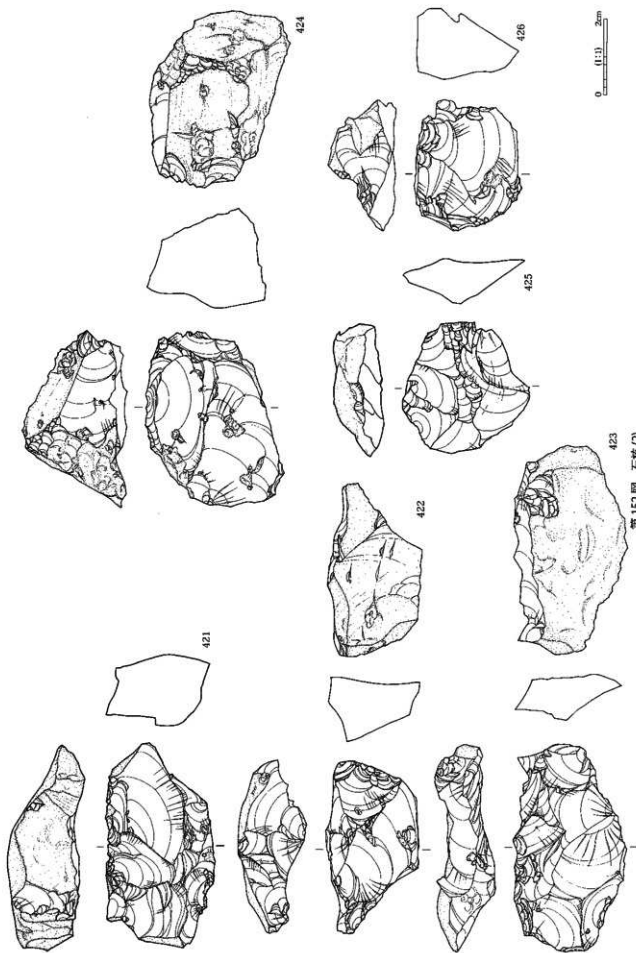
第149図 西郷石器(1)



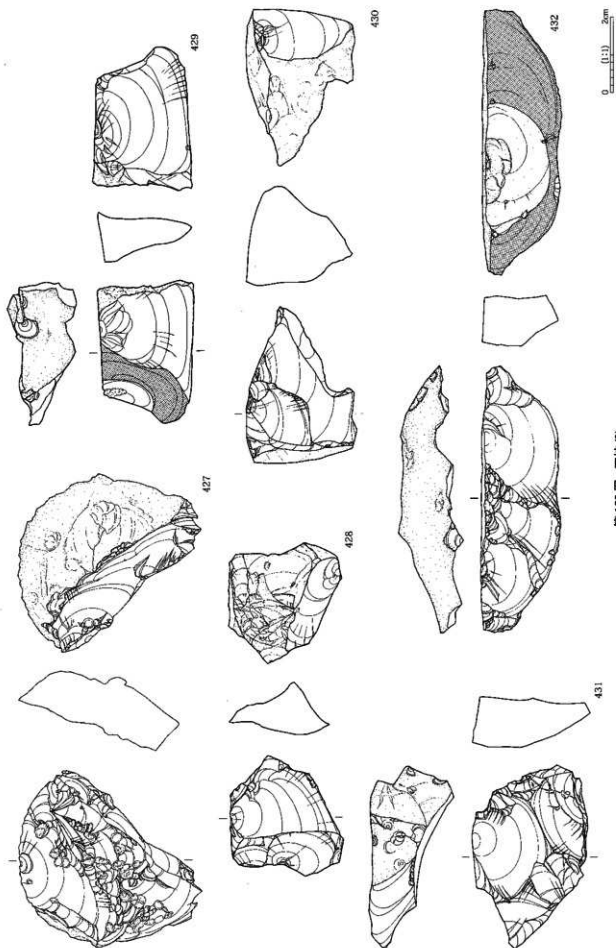
第 150 図 両極石器 (2)



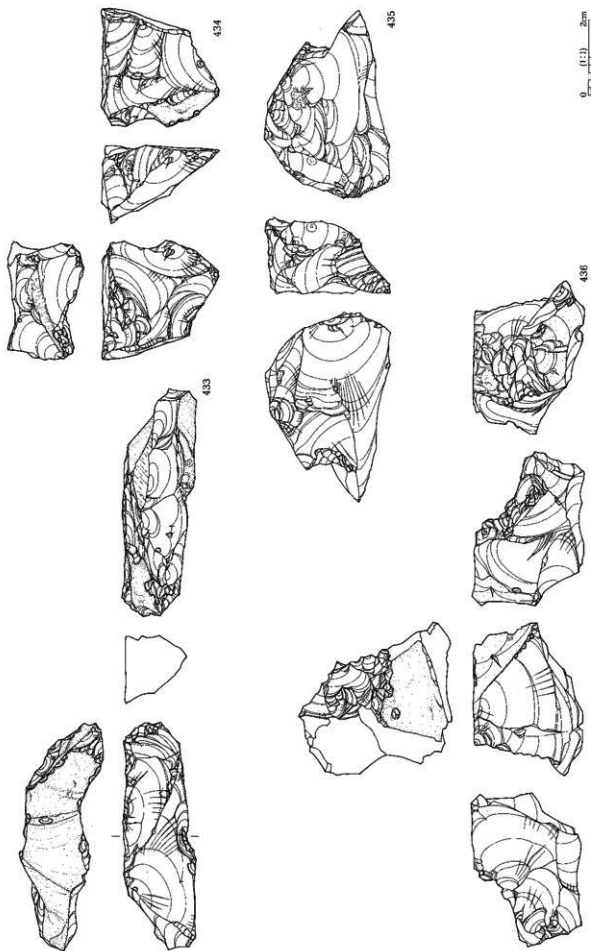
第151圖 石核(1)



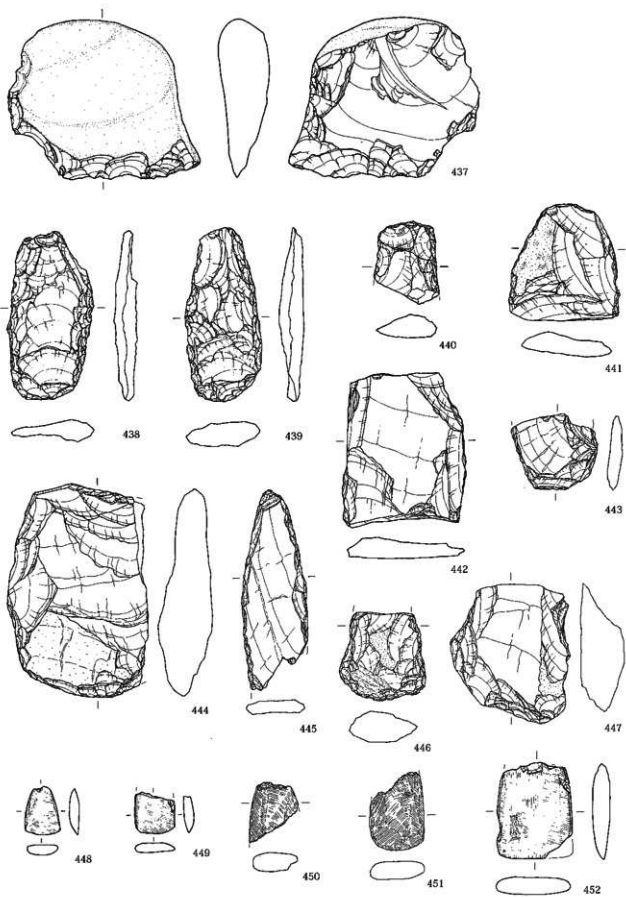
第152圖 石核(2)



第153圖 石核(3)

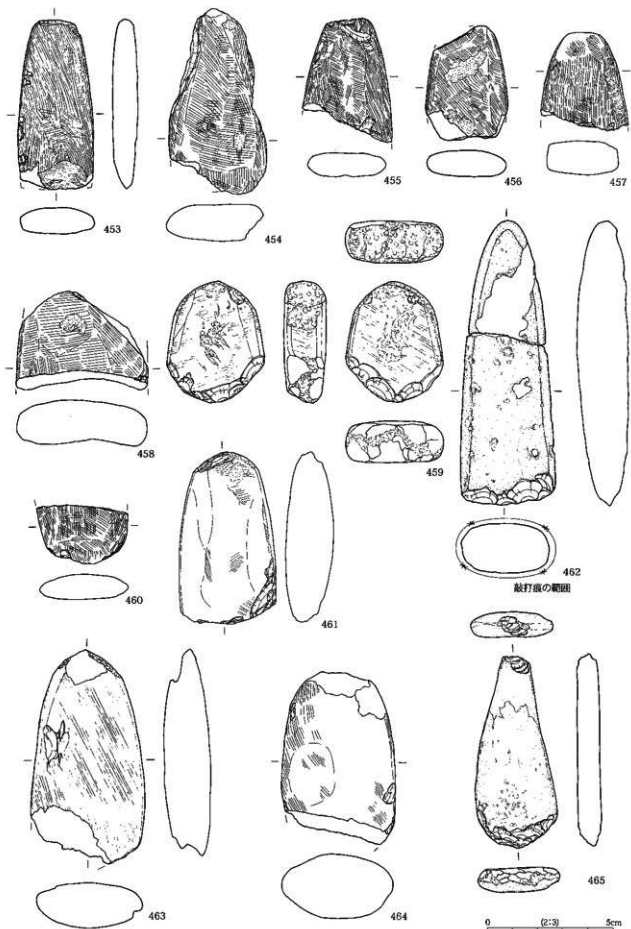


第 154 圖 石核 (4)



0 2.5 5cm

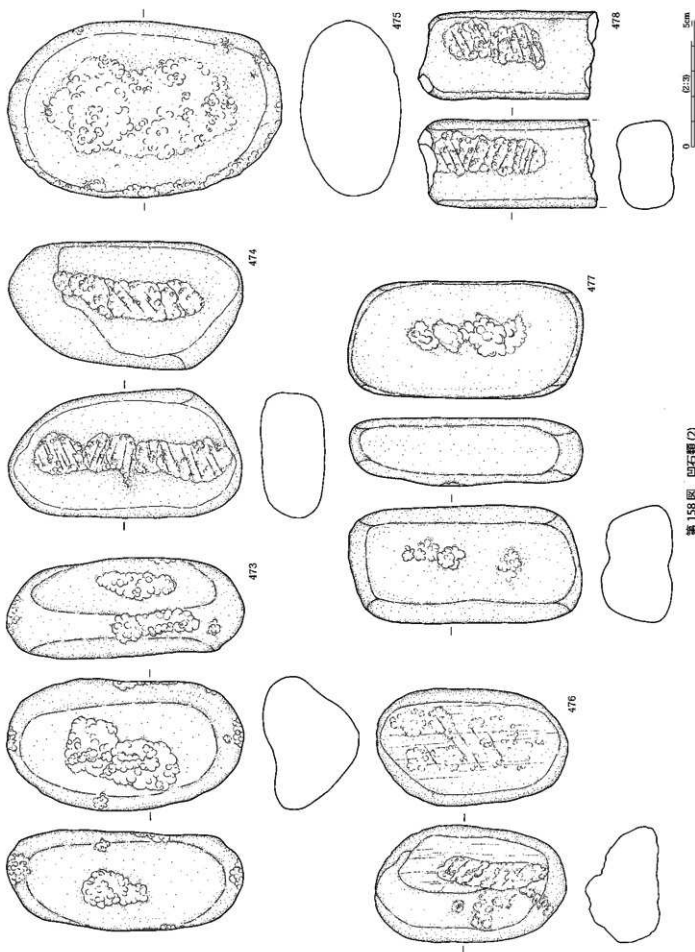
第155図 礮器、打製石斧、磨製石斧(1)

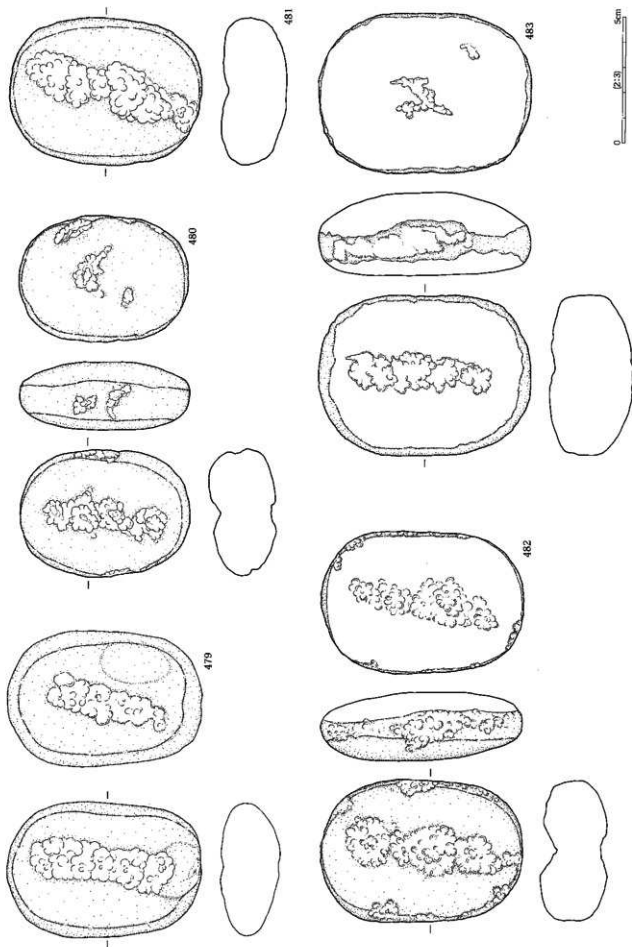


第156図 磨製石斧(2)、敲石

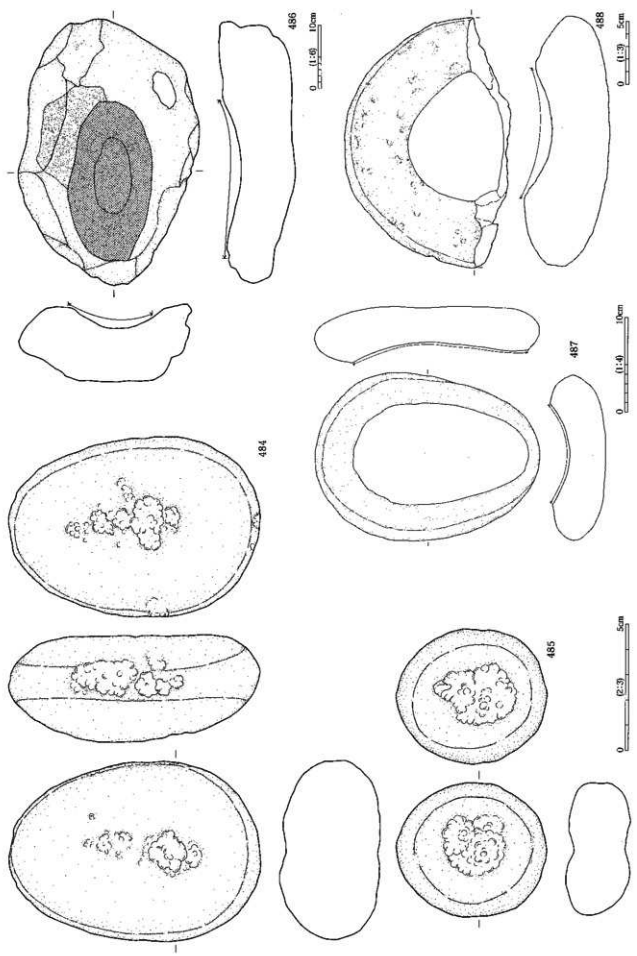


第157図 凹石類(1)

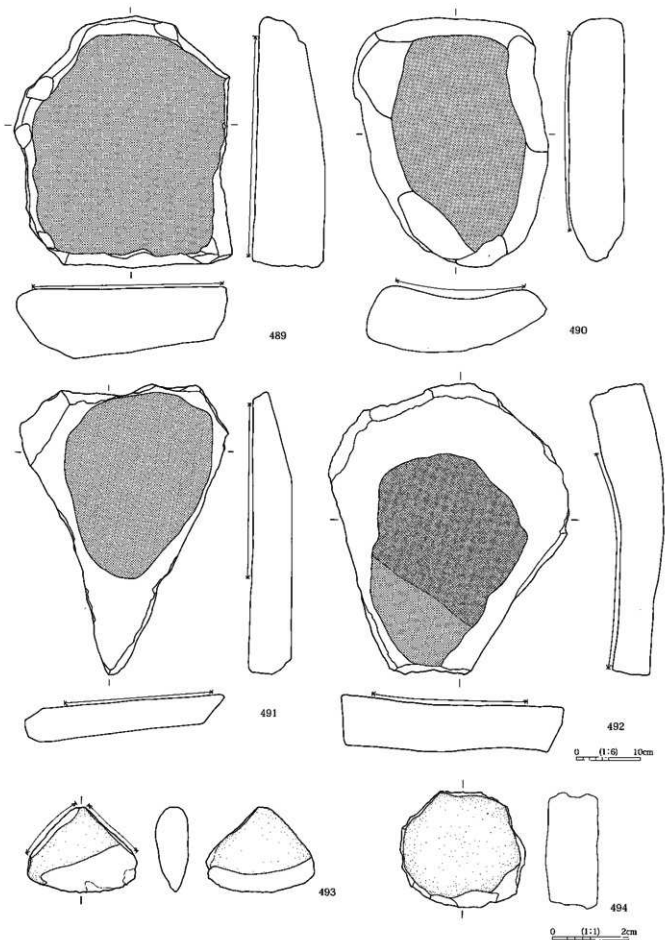




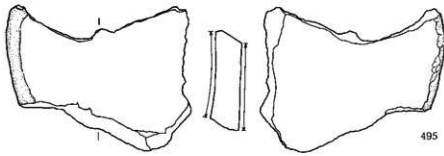
第159圖 凹石類(3)



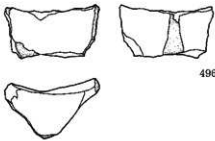
第160圖 凹石類(4)、石皿(1)



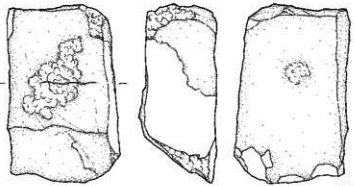
第161図 石皿(2)、軽石製品、石製円盤



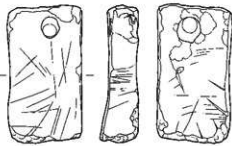
495



496



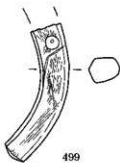
497



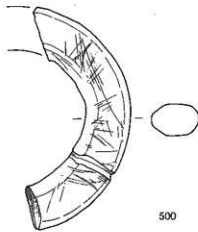
498



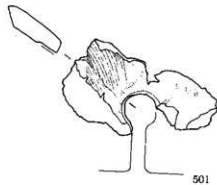
0 (1:2) 5cm



499



500



501

0 (1:1) 2cm

第162图 砾石、扶杖耳饰

第5章 中世の遺構と遺物

第1節 概要

中世の遺構は調査区東側、湿地縁辺のⅡE 13・17・18・23グリッドで、性格不明の土坑2基と流路跡1条を検出した。検出面は基本層序の第Ⅲ層で、それよりも上部では遺構覆土との識別が付かず、掘り下げた結果、縄文前期の検出面・第Ⅱb層よりも低い、第Ⅲ層で遺構プランを検出するに至った。また、出土遺物は土器と陶磁器類で、時期は全て13世紀代である。出土地点はⅡE 17・18・22～24グリッドとなり、遺構分布範囲と重複する。中世の遺構・遺物は、今回の調査区では、これ以外の地点には存在しないので、遺構・遺物の分布がさらに広がるとすれば、湿地の周辺部と推測されよう。

第2節 遺構

1. 土坑

SK1 (第163図、PL10) 位置：ⅡE 12・17グリッド

形状：円形 規模：長軸139.5cm、短軸138cm、深さ65cm 遺構の重複：なし。

調査の経緯：基本層序の第Ⅲ層で、土坑覆土と第Ⅲ層にみられる色調の差異などを根拠に検出した。

遺物出土状況：1層下部～2層中に、径15～25cm大の礫が北・東壁～土坑中央にかけて遺存していた。

礫の被熱痕は不明確である。また、1層から13世紀のカワラケ1点(1276)、48.1gが出土した。

時期：不明確だが、覆土1層から13世紀代のカワラケが出土した点、SK1の周辺に13世紀代の遺物分布が広がる点などをもって、13世紀代の所産と考えたい。

SK2 (第163図、PL10) 位置：ⅡE 18グリッド

形状：円形 規模：長軸95.5cm、短軸94.5cm、深さ42cm 遺構の重複：なし。

調査の経緯：基本層序の第Ⅲ層上面で、20～30cm大の礫の纏まりを検出。礫を記録し取り上げた後、第Ⅲ層を掘り込む円形プランを検出した。なお、礫に被熱痕跡は認められない。

遺物出土状況：礫下部で、覆土1層中から、13世紀代と思われるカワラケの破片16.2gが出土した。

時期：不明確だが、覆土から13世紀代のカワラケが出土した点、SK2の周辺に13世紀代の遺物分布が広がる点などをもって、13世紀代の所産と考えたい。

2. 流路跡

NR3 (第164図、PL14) 位置：ⅡE 13・18・23グリッド

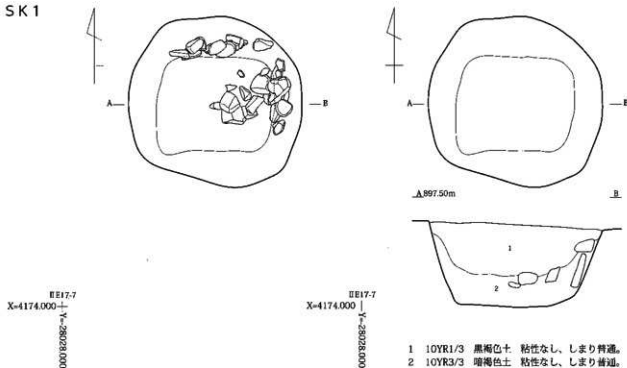
調査の経緯：基本層序の第Ⅲ層上面で、流路跡覆土と第Ⅲ層にみられる色調などの差異から検出したが、ⅡE 18グリッドの南側付近ではプランが検出できなかった。

形状：調査区外からⅡE 13・18・23 グリッドへと至る直線的な流路跡で、全体形状は直線的だが、壁線は細かく蛇行し幅が一定ではない。北～南方向へ流れ込むと考えられ、比高差は60 cmである。断面形は皿状を呈する。規模：長さ107 m以上、幅54～115 cm、深さ10 cm程度 遺構の重複：なし。

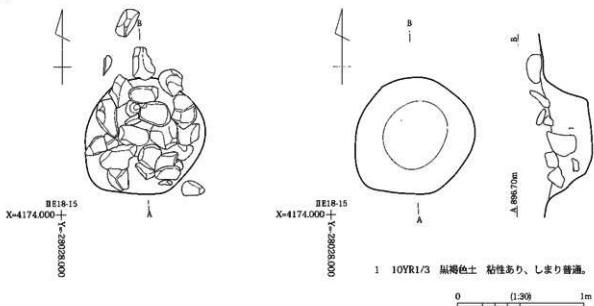
遺物出土状況：覆土から、15～25 cm大の礫とともに、断片的な資料ではあるが、縄文時代前期前葉土器17.8 g、中期葉土器10.8 g、および中世の土器・陶磁器類30.4 gが出土した。礫の分布は、流路跡全体に広がる。

時期：不明確だが、覆土で13世紀代の遺物が出土した点、周辺で13世紀代と推測される土坑2基が検出された点、本址周辺に13世紀代の遺物分布が広がる点を考慮すれば、13世紀代の可能性はある。

SK 1

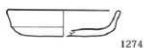


SK 2

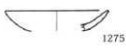


第163図 中世の土坑

手づくねカワラケ



1274



1275



1276



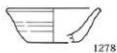
1282

古瀬戸水注

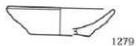
ロクロカワラケ



1277



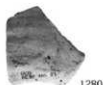
1278



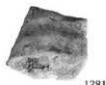
1279



龍泉窯系青磁碗・小鉢



1280



1281



1283



1284



常滑系大甕



1288



1285



1286



1287

山茶碗こね鉢



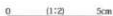
1289



1290



1291



第165図 中世の土器・陶磁器類

第3節 遺物

13世紀代のカワラケ(1274～1281)、古瀬戸水注(1282)、龍泉窯系青磁碗・小鉢(1283～1287)、常滑系大甕(1288)、山茶碗こね鉢(1289～1291)が出土した。断片的な資料であり、詳細は不明確なものが多い。ロクロ整形カワラケは、底部に糸切り痕が観察され、板状圧痕等を伴う場合もある。しかし、ここで提示した資料は小破片で器面状態が悪く、糸切り痕のみの1277を除いて器面調整は不明確である。1277は、見込み部の外周をドーナツ状に凹ませる。また、龍泉窯系青磁では、器形的な特徴から1284が小鉢、1283・1285～1287が碗と考えられる。

中世の遺構・遺物は調査当初、湿地縁辺に纏まり検出されたので、湿地や水辺の祭祀との関連に注目した。しかし、上記の遺物を見る限り、普通の集落遺跡で出土するものと何ら変わりはなく、さらに出土状況も、例えばカワラケが纏まって多量に出土した、というような祭祀的な状況もみられない。自然流路(NR3)の在り方や遺物出土状況から、遺構・遺物の分布は調査区外へさらに広がると考えられる。

第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代(A M S)測定分析

1. 分析試料と結果

長野県には、縄文前期初頭・前葉土器の分析データが存在しないので、データの収集・蓄積を計るとともに塚田式や中越式、木島式、清水ノ上Ⅱ式とされる土器の実年代を測定して、土器編年と比較することを分析の目的とした。試料は土器外面に付着した炭化物で、分析に耐え得る量が付着していた6点を抽出した。分析は、(株)加速器分析研究所に委託して行っており、その結果は下表のとおりである。

試料 No.	図版 No.	時期	土器型式	出土位置	年代測定結果	備考
1	8	前期前葉	中越式	S B 37	5750 ± 50 (yrBP)	管理 No. 7
2	383	前期前葉	中越式	S B 48	5860 ± 50 (yrBP)	管理 No.575
3	660	前期前葉	中越式	S B 57	5800 ± 40 (yrBP)	管理 No.900
4	1062	前期前葉	清水ノ上Ⅱ式	I Q 25	5700 ± 40 (yrBP)	管理 No.1111
5	374	前期前葉	木島式	S B 48	5800 ± 40 (yrBP)	管理 No.541 + 1386
6	773	前期初頭	塚田式	S B 64	6173 ± 37 (yrBP)	管理 No.1633

第10表 年代測定分析試料と結果

2. 分析結果の整理

塚田式の年代は、試料 No. 6 の結果から知ることができる。試料 No. 6 は、誤差の範囲を含めて 6136 ~ 6210 年 (yrBP) となり、全試料の中で最も古い測定値を得た。また、中越式は試料 No. 1 ~ 3 を計測した結果、試料 No. 2 が 5910 ~ 5810 年 (yrBP) と最も古いものであった。試料 No. 1 の塚田式と、試料 No. 2 の中越式は、測定値で 226 ~ 400 年の差が認められる。この結果は、土器編年上、塚田式が前期初頭に、中越式が前期前葉に位置付けられる順序と矛盾しない。

中越式は、上記のとおり試料 No. 2 が最も古く、試料 No. 1 が誤差範囲を含めて 5700 ~ 5800 年 (yrBP) と最も新しい。両者の年代幅を統合すると 210 年で、この 5910 ~ 5700 年 (yrBP) の中間に、試料 No. 3 が位置付く。この結果、試料 No. 1 ~ 3 の新旧関係は、年代幅をもちつつも試料 No. 2 → No. 3 → No. 1 の順序となる。

次に、中越式を、第4章で示した前期前葉土器の変遷図と対比する。試料 No. 1 は胴下部の小破片で、これのみでは時期判別はできない。そこで、第37号竪穴住居跡の覆土で出土し、器形復元された中越式(第68図1)に注目する。この中越式は頸部に段を作出せず、頸部が浅く括れ、口縁部が比較的短く外反するなどの器形的な特徴を備える点から、変遷図のⅣ段階に位置付けられるものである。さらに、第37号竪穴住居跡には、Ⅲ・Ⅴ段階に該当するような中越式は存在しないので、試料 No. 1 もとりあえずⅣ段階と推測しておきたい。

試料 No. 2 は、頸部に段を作出せず、頸部の括れが明確であるといった器形の特徴から、Ⅳ段階に位置付けられよう。試料 No. 2 が出土した第48号竪穴住居跡では、Ⅳ段階の土器が纏まって出土している。

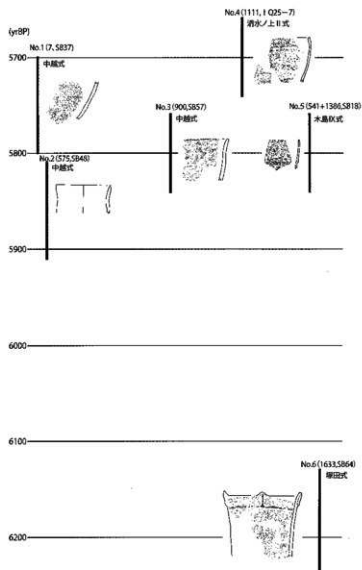
試料 No. 3 は小破片のため不明確だが、頸部に段をもたない点から、Ⅲ段階には該当しない。かなり浅いが頸部に括れがみられ、口縁部が短く外反するといった器形を重視すればⅣ段階である。その一方で、試料 No. 3 が出土した第57号竪穴住居跡では、Ⅴ段階の神ノ木式の破片が多く見受けられるので、その点

ではV段階の可能性も生ずる。いずれにしても、土器の出土状況や器形的な特徴からでは、試料 No.3の時期を決定する根拠に欠ける。しかし、年代測定分析結果をみると、IV段階と推測された試料 No.1 が、試料 No.3よりも新しい年代が得られているので、この分析結果を考慮すれば、試料3がV段階に位置付く可能性は消滅する。以上から、試料 No.1～3の中越式は、土器変遷図のIV段階に位置し、年代測定分析結果から、IV段階は試料 No.2の 5860 ± 50 年 (yrBP) より試料 No.1の 5750 ± 50 年 (yrBP) までの、最大210年の年代幅をもつと理解できる。さらに、試料 No.3がIV段階に含まれることで、試料 No.3が出土した第57号竪穴住居跡の覆土出土土器は、IV～V段階に時期が跨ると推測されよう。

試料 No.4・5は東海系土器群である。試料 No.4は清水ノ上Ⅱ式とされる土器で、土器編年では神ノ木式・関山Ⅱ式並行期に位置付けられてきた。神ノ木式・関山Ⅱ式並行期は、第4章の土器変遷図ではV段階に該当し、6点の分析試料では最も新しい時期と推測される。一方の、試料 No.5は木島式であり、口縁部を無文とし、頸部の段と口唇部直下に刺突を施す、といった型式学的な特徴からみて木島Ⅰ式と考えられる。木島Ⅰ式は、中越式Ⅱ段階に並行する時期とされ(渋谷1991)、第4章の土器変遷図ではIV段階に相当するものと思われる。

両試料に対する年代測定分析の結果、試料 No.4は 5700 ± 40 年 (yrBP)、試料 No.5は 5800 ± 40 年 (yrBP) で、試料 No.4と試料 No.5の時間幅は重複せず、試料 No.4のほうが試料 No.5よりも新しいとする、従来の土器編年に沿った妥当な結果が出た。また、試料 No.5の年代は、IV段階の中越式である試料 No.1～3の年代幅に収まり、しかも試料 No.3とは年代が完全に一致する。拠って、試料 No.5は土器変遷図のIV段階となり、そして、それよりも新しい試料 No.4はV段階に位置付けられる。土器の並行関係から類推された、時間的な位置と同様な結果が、年代測定分析でも出されたといえる。

以上、試料6点の年代測定分析について述べてきたが、従来の土器編年や第4章に掲載した土器変遷図と、年代測定分析結果による試料の年代的な順序が一致したものになった。各試料の生データを、本書付録DVDに収録したので参照されたい。



第166図 年代測定分析の結果

第2節 土器胎土分析

1. 分析試料

縄文時代早期末葉～前期前葉、後期前葉土器の合計 20 点を分析試料とした。各時期の試料点数は早期末葉 1 点、前期初頭 9 点、前期前葉 9 点、後期前葉 1 点で、土器型式で認識されるどころの、いわゆる在地系土器群と関東系・東海系土器群がそれぞれに含まれている（第 167 図、第 11 表）。分析の目的は、土器製作の候補地を推定するのではなく、各時期の土器胎土構成を明らかにすることである。

分析方法は試料の薄片を作成し、偏光顕微鏡で観察する方法で、微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子の特徴について記載を行い比較した。分析は、㈱パレオ・ラボに委託した。

2. 分析結果の提示

胎土分析試料は 20 点で、駒形遺跡出土土器の全体量からすれば極めて少数である。そのため、それぞれの分析結果を、各土器型式の一般的な傾向とみてよいか、といった点では不明確といえる。胎土構成の詳細な検討は、データの蓄積とともに将来の課題とし、ここでは分析データを示して土器型式を対比するに止めたい。

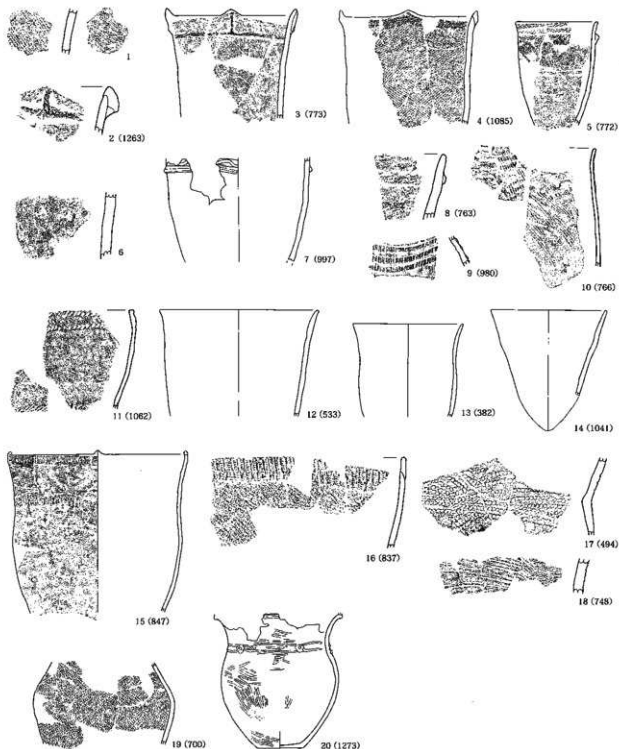
試料 No.	図版 No.	時期	土器型式	出土位置	備考
1	未掲載	早期末葉	絛条体丘復文土器群	在地系	S B 53 管理 No.754 燃糸・夾炭
2	1263	前期初頭	塚田式	在地系	I X 21 - 12 II b 管理 No.1412
3	773	前期初頭	塚田式	在地系	S B 64 管理 No.1633
4	1085	前期初頭	中道式	在地系	I R 21 - 13 管理 No.1401
5	772	前期初頭	花積下層式	関東系	S B 62 管理 No.1632
6	未掲載	前期初頭	不明	不明	S B 53 管理 No.758 無文
7	997	前期初頭	隆帯文土器	在地系	I Q 13 - 1 管理 No.1002
8	763	前期初頭	隆帯文土器	在地系	S B 62 管理 No.1622
9	990	前期初頭	木島式	東海系	II E 11 管理 No.1396
10	766	前期初頭	木島式	東海系	S B 62 管理 No.1626
11	1062	前期前葉	清水ノ上II式	東海系	I Q 25 - 7 管理 No.1111
12	533	前期前葉	中越式	在地系	S B 54 管理 No.777
13	382	前期前葉	中越式	在地系	S B 48 管理 No.552
14	1041	前期前葉	中越式	在地系	I Q 25 管理 No.1121 胎土に繊維を含む
15	847	前期前葉	神ノ木式	在地系	S B 67 管理 No.1687
16	837	前期前葉	神ノ木式	在地系	S B 67 管理 No.1698
17	494	前期前葉	有尾式	在地系	S B 53 管理 No.1483
18	748	前期前葉	有尾式	在地系	S B 61 管理 No.1596
19	700	前期前葉	關山式	関東系	S B 58 管理 No.962
20	1273	後期前葉	坂ノ内式	関東系	I Q 18 管理 No.1024

第 11 表 土器胎土分析試料

第 12 表は、20 点の胎土分析結果である。土器胎土の材料は、粘土と混和材から構成され、珪藻・骨針などの微化石類から材料粘土の起源を推定し、大型岩石片の組成から起源別岩石と量比を推定する。

駒形遺跡では、材料粘土として a) 淡水成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土、c) その他の粘土に分類される。また、混和材は砂粒物の特徴から、凝灰岩類を普遍的に含み、その他起源の岩石を伴う一群（E g, E c, G e, E b, B e, E d）と、深成岩類を主体として凝灰岩類を伴わない一群（B）に分類される。以下、この分類と各土器型式の傾向をみる。

早期末葉の絛条体丘復文土器群と前期初頭の塚田式、中道式（試料 No. 1～4）は淡水成の粘土で、凝



第167図 分析試料

灰岩類を普遍的に伴う砂粒組成の一群として一括されるが、細かな砂粒組成はE・b・Be・Eg・Ge群と異なる。花積下層式(試料No.5)と型式不明の無文土器(試料No.6)は、ともに水成粘土で、砂粒組成も深成岩類を除いて一致する。隆帯文土器は、その他の粘土で凝灰岩を普遍的に伴う砂粒組成のもの(試料No.7)と、水成粘土で深成岩類を主体として凝灰岩類を伴わない砂粒組成のもの(試料No.8)に分かれている。前期初頭の塚田式・中道式、およびその成立母体と考えられる早期末葉の絡条体正痕文土器群は、在地系の土器である。それが、隆帯文土器や花積下層式とは異なり、淡水成粘土と凝灰岩を普遍的に伴う

No.	管理No.	粘土の特徴					砂粒の特徴					鉱物の特徴			植物花粉体化石	その他特徴			
		分類	種類	淡水種 珪藻化石	不明種 珪藻化石	背斜 化石	篩子 化石	分類	堆積 岩類	深成 岩類	火山 岩類	テフラ 岩類	凝灰 岩類	ジル コン			角閃石 類	輝石類	雲母類
1	754	○	淡水成	○	◎	△	◎	E b	△	○	○	○			++	+	++	○	植物繊維多産、 ヨシ属
2	1412	○	淡水成	○	◎		○	E e	△	○	△				++	+	+	◎	植物繊維多産
3	1633	○	(淡水成)	△	○		○	E g	△	△	△	○	○		+++	+	+	○	植物繊維多産
4	1401	○	(淡水成)	△	○		△	G e	△	△	○	◎			++			○	植物繊維多産
5	1632	△	水成		△		△	E g	△	△	○	◎			++			○	植物繊維多産
6	758	△	水成		△		△	E g	△		○	◎		+	++	+		○	植物繊維多産
7	1002	-	その他				△	E d	△		○	◎			++	+		○	凝灰質粘土
8	1622	△	水成		△		△	B	△	△					++	+		○	植物繊維多産
9	1396	-	その他				B	△	△					++	++	+	+++	○	
10	1626	-	その他				B	○						++	++	+	+	○	
11	1111	-	その他				B	○						+	++	+	+	○	
12	777	-	その他				B	△	○			△		++	++	+	+++	△	凝灰質粘土
13	552	○	淡水成	○	○		○	E g	△		○	◎	◎	+	+++			○	
14	1121	△	水成		△		○	G e	△		△			+++				○	植物繊維多産
15	1687	○	(淡水成)	△	○		△	E c	△		△	◎	+	+	+			○	凝灰質粘土?
16	1698	○	(淡水成)	△	○		△	E c	△		△	◎	+	+	+			○	凝灰質粘土?
17	1483	○	(淡水成)	△	△		○	E g	△		△	◎			++	+	+	○	
18	1596	-	その他					E g	△		△	◎	+	+		+		○	
19	962	-	その他				E c	○			△	◎	+	+	+	+	+	○	植物繊維多い
20	1024	-	その他				E c	○			○	△	◎		++	+		○	凝灰質粘土

第12表 粘土分析結果

一群として纏まる。また、土器型式としては同一でも、隆帯文土器の2点は、粘土と砂粒の特徴が異なる。

前期前葉では、在地系の中越式3点が、その他の粘土で深成岩類を主体として凝灰岩類を伴わないもの(試料 No.12)、淡水成の粘土で凝灰岩を普遍的に含みその他起源の岩石を伴うもの(試料 No.13)、水成粘土で凝灰岩類を普遍的に含みその他起源の岩石を伴うもの(試料 No.14)、と各試料で特徴が異なる。その一方で、在地系の中ノ木式2点(試料 No.15・16)は、ともに淡水成の粘土で、凝灰岩を普遍的に含み堆積岩類を伴うもの(E g 群)として完全に一致し、さらに有尾式の2点は、凝灰岩を主体としてテフラなどを伴う一群(E g 群)に所属するものの、粘土は淡水成粘土(試料 No.17)とその他の粘土(試料 No.18)に分かれている。関東系の関山式(試料 No.19)は、砂粒組成では中ノ木式と同じ、凝灰岩を普遍的に含み堆積岩類などを伴う一群(E c 群)だが、粘土の特徴はその他の粘土に分類される。

前期初頭・前葉に所属する東海系土器群は、2点(試料 No.9・10)が木島式、1点(試料 No.11)がいわゆる清水ノ上Ⅱ式であり、土器編年上では清水ノ上Ⅱ式の方が、木島式の2点よりもやや新しい時期に位置付けられる。しかし、この3点は全て、その他の粘土で深成岩類を主体とする一群(B 群)に分類されるなど、粘土と砂粒の特徴が完全に一致している。

後期前葉は、堀ノ内式の1点のみ(試料 No.20)だが、その他の粘土で凝灰岩類を主体として堆積岩類などを伴う一群に分類されている。

前期初頭・前葉のそれぞれにあって、在地系土器群と関東系・東海系土器群が全く同じ特徴をもつ例は存在しなかった。各試料の結果と、土器型式の対比が意味するものについて、今後の課題とした。

第3節 赤色顔料分析

1. 分析試料

第66号竪穴住居跡（S B 66）出土の、中越式に入れられていた粉末状の赤色物と、遺構外のI W 03グリッドで採取された塊状の赤色物について、その成分を明らかにするため分析を実施した。分析方法は、蛍光X線分析で、嶋パレオ・ラボに委託した。分析結果は以下のとおりである。

試料 No.	内 容	出土位置	時 期	産 状
1	塊状の赤色物	I W 03	不明	高脚小椀状（パイプ状、板状）
2	粉末状の赤色物	S B 66 No. 1	縄文時代前期	中越式土器に入れられた状態で出土

第13表 顔料分析の試料

2. 分析結果と赤色顔料関係資料

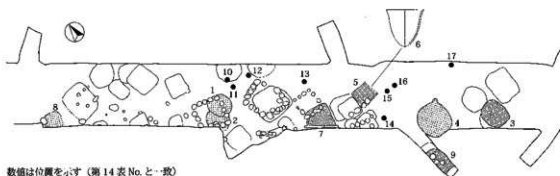
蛍光X線分析の結果、試料1は褐鉄鉱の可能性が高く自然物で、試料2は顔料としてのベンガラと判明した。試料2は、第66号竪穴住居跡床面で潰れていた中越式土器の（第37・103図、P L 7）、破片の間から検出された粉末であり、分析結果からベンガラを入れた中越式土器が潰れて出土したと解釈される。つまり、この中越式土器はベンガラを入れる容器として、使用されていたと考えられる。

ベンガラを塗る対象として、想定されるものの1つに、土器を挙げることができる。調査では、縄文前期初頭～前葉を主体に多量の土器が出土した。しかし、その中にベンガラが施されたと思われるものは1点も存在しなかった。この点から、駒形遺跡の縄文前期初頭～前葉では、ベンガラを土器に施す行為は一般的ではなかったといえる。掘って、ベンガラを塗った対象物は、今回の調査では得られなかったもの、例えば木製品への塗布や建物を構築する建築部材への装飾などであったと推測しておきたい。

次に、ベンガラの生産について考える。駒形遺跡では、ベンガラと思われる赤色物（非分析なのでベンガラと断定できない）が付着した凹石類が認められる。凹石類の出土総量520点中、21点に赤色物が付着していた。この凹石類は、土器・石器などほかの遺物とともに、竪穴住居跡覆土や遺構外から出土しており、凹石類のみが特殊な状況で出土したわけではない。出土地点をみると、遺構分布範囲の全体で出土し、ほかの遺物が多く出土したグリッドには、凹石類も比較的集中するといった傾向がみられる。強いていえば、1点が出土した第69号竪穴住居跡だけが、より西側に位置している。また、竪穴住居跡からの出土点数は1点が多く、その中で第48・67号竪穴住居跡の2軒はそれぞれ4点、3点とやや数が突出する。

No.	出土位置	内 容	点 数	No.	出土位置	内 容	点 数
1	S B 43	凹石類	1	10	I W 03 - 6	凹石類	1
2	S B 44	凹石類	1	11	I W 03 - 10	凹石類	1
3	S B 47	凹石類	1	12	I W 03 - 12	凹石類	1
4	S B 48	凹石類	4	13	I W 09 - 12	凹石類	1
5	S B 66	凹石類	1	14	I W 20 - 12	凹石類	1
6	S B 66	中越式内部のベンガラ	1	15	I X 16 - 2	凹石類	1
7	S B 67	凹石類	3	16	I X 16 - 3	凹石類	1
8	S B 69	凹石類	1	17	I X 18 - 9	凹石類	1
9	S B 70	凹石類	1			凹石類の合計	21

第14表 ベンガラ・赤色物付着凹石類の出土地点と内容



数値は位置を示す（第14表No.と一致）

第168図 ベンガラ・赤色物付着凹石類の出土地点

凹石類にみられる赤色物は、凹部や磨面といった機能部に付着しているため、凹石類を使用する際に付着したと考えるのが普通である。凹石類の性格からして、赤色物を装飾とするのは考えにくい。赤色物がベンガラとなれば、この凹石類は、例えばベンガラを塗る際に使用したもの、あるいはベンガラを粉末状のものにするなど、ベンガラの生産工程に直接関わったもの、などであった可能性が指摘できる。また、凹石類の使用にあたり、石皿とセットであったことが考えられよう。しかし、今回の調査では、石皿の中に凹石類のような明瞭な赤色物が付着したものは認められなかった。実は、凹石類と石皿は、赤色物が付着しているとは想定せずに水洗したため、これにより石皿の赤色物が消滅した可能性はある。実際、凹石類に付着する赤色物の残存状況を見ると、水洗の影響で落ちてしまった部分がみられる。しかし、凹石類と石皿の石材は同じ安山岩で、同じ条件で水洗した凹石類には赤色物が残り、石皿は不明瞭というのは不可解ではある。石皿の使用法として、多量の赤色物が石皿の磨面に付着するような使用方法ではなかった、あるいは赤色物に対して石皿は使用していない、とする推測も可能である。前者の場合、方法は不明確だが、後者では凹石類と石皿以外のもの、例えば凹石類をセットで使用した可能性が指摘されるものの、あくまでも推測の域をでない。

第4節 黒曜石産地同定分析

1. 分析試料

駒形遺跡に持ち込まれた、黒曜石の原産地を推定することを目的とし、縄文時代前期初頭～前葉に所属すると思われる55,325点の黒曜石製石器から、8,195点を試料として抽出した。試料には遺構出土と遺構外出土があり、抽出にあたり石鏃・スクレイパー・石匙・石錐などの各種小形石器製品、石鏃未製品、原石・石核・剥片類などの非製品を取り混ぜ、肉眼観察でも明確にわかる色や顔つきの差異（黒色を早するもの、白い縮状の帯びが入るもの、赤色が混じるもの、表皮に黄褐色の粒子がみられるものなど）などにも配慮した。黒曜石製石器全体から、こうした試料を任意に抽出したので、遺構単位では試料数にばらつきが生じている。

また、縄文時代前期初頭～前葉以外の時期について、国史跡範囲内で検出された第27号竪穴住居跡（長野県教委1997）から中期中葉（藤内式期）の25点、県営は場整備事業に伴う調査で検出された黒曜石集中地点（茅野市教委2002）から後期中葉（加曾利B2式期）の50点、また、駒形遺跡と同一扇状地上に立地し、駒形遺跡のすぐ北側に隣接する、大六殿遺跡の第1号竪穴住居跡（茅野市教委2002）から前期末

エリア	判別群	記号	前期初頭～前葉				計	%	前期末葉	中期中葉	後期中葉
			1回目	2回目	3回目	4回目					
和田 (WO)	ブドウ沢	WOBD	1	3	5	0	9	0.11	0	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0	0	0	0	0.00	0	0	0
	富松沢	WOTM	11	22	34	0	67	0.82	0	0	0
	芙蓉ライト	WDHY	1	5	10	0	16	0.20	0	0	0
和田 (WD)	鷹山	WDTY	214	442	497	0	1153	14.10	0	4	0
	小深沢	WDKB	19	30	23	0	72	0.88	0	0	0
	土屋橋北	WDTK	17	55	18	3	93	1.14	0	0	0
	土屋橋西	WDTN	42	63	37	0	142	1.74	0	0	0
	土屋橋南	WDTM	16	38	14	0	68	0.83	0	0	0
	古神	WDHT	0	0	0	0	0	0.00	0	0	0
	諏訪	SWHD	1037	2569	2469	12	6087	74.46	25	20	49
蓼科	冷山	TSTY	68	116	90	0	274	3.35	0	0	0
	京子山	TSHG	0	0	0	0	0	0.00	0	0	0
	権助山	TSSB	0	0	0	0	0	0.00	0	0	0
天城	拾録1	AGKT	0	0	1	0	1	0.01	0	0	0
その他			0	0	0	0	0	0.00	0	0	0
測定不可			32	96	80	5	213	2.61	0	1	1
計			1458	3439	3278	20	8175	100	25	25	50

第15表 黒曜石産地同定分析結果

葉の25点、合計100点を補足した。これを加算すると、試料は8,295点となる。分析方法は蛍光X線分析で、分析は国立沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に委託して行った。

2. 分析結果と比較

個々の分析データは膨大な量なので、本書付録DVDに収録した黒曜石産地同定結果観察表を参照されたい。ここでは、分析データを集計し、前期初頭～前葉、前期末葉、中期中葉、後期中葉の黒曜石原産地比率と推移の傾向をまとめてみたい。各時期の分析結果は、第15表のとおりで、表中および下記の文章中に示したエリア・判別群・記号・名称等は、望月明彦氏の分析結果報告書（本書付録DVDに収録）に従っている。

駒形遺跡は、その立地環境から、霧ヶ峰周辺や和田峠周辺の原産地から持ち込まれた黒曜石が多いと推測されたが、分析ではそれを肯定する結果が得られている。

前期初頭～前葉では、諏訪星ヶ台が最も多く全体の74.46%を占める。次に多いのは、和田エリア(WO・WD)で、各判別群の合計が19.82%、さらに蓼科冷山も3.35%が認められる。和田エリア(WO・WD)では、鷹山が14.10%と高比率である。そのほか、1点のみだが、静岡県梶峠産と結果が出たものが存在した。この試料は、石鏡(分析No.7346)であった。諏訪星ヶ台と和田鷹山は、合計で88.56%に達するものの、比率的には諏訪星ヶ台が和田鷹山の約3.8倍になるなど、諏訪星ヶ台に著しく偏っている。一方、蓼科冷山の黒曜石が極少量とはいえ認められるのは、黒曜石原産地と集落の関係が、単に黒曜石原産地との距離だけではないことを示している。

前期末葉では、分析試料全てが諏訪星ヶ台、中期中葉では諏訪星ヶ台が80%、和田鷹山が16%、後期中葉では測定不可の1点を除き、全てが諏訪星ヶ台で、諏訪星ヶ台の比率が上昇する傾向がみられる。和田鷹山の黒曜石は、中期中葉に認められるのみで、前期末葉と後期中葉には認められなかった。そして、前期初頭～前葉には、微量ながらも存在した鷹山以外の和田エリア(WO・WD)産黒曜石が、中期中葉では和田鷹山のみに限られている。

和田鷹山を主体とする和田エリア(WO・WD)の黒曜石は、諏訪星ヶ台の比率がやや少ない前期初頭～前葉と中期中葉に認められ、諏訪星ヶ台の少ない分を和田エリア(WO・WD)で補うような状況がみられる。その比率は、前期初頭～前葉が14.10%、中期中葉が16%で、時期が下るに従い比率が増加する、

諏訪星ヶ台原産地とは違っている。また、前期初頭～前葉で3%が存在した蓼科冷山は、前期末葉以降、各時期において全くみられず、この結果をみる限り、駒形遺跡と蓼科冷山原産地との関係は、前期初頭～前葉のみであったとすることができよう。

ここで、茅野市北山芹ヶ沢に位置する、聖石遺跡・長峯遺跡の黒曜石産地同定分析結果を参照したい。この2遺跡は、同じ台地上部に隣接する、中期～後期にかけての集落遺跡で（長野県埋蔵文化財センター2005）、蓼科エリアの黒曜石原産地に近い。黒曜石原産地近隣の集落遺跡といった点では、駒形遺跡と同じ立地環境である。聖石遺跡では662点、長峯遺跡では1443点の黒曜石を、駒形遺跡と同一機関・方法によって、産地同定分析を実施している。結果は、聖石遺跡では諏訪星ヶ台が90.48%、各判別群を合計した和田エリア（WO・WD）が3.92%で、近隣の蓼科エリアは各判別群を合計しても5.58%と比率が低い。長峯遺跡では、諏訪星ヶ台が81.79%、各判別群を合計した和田エリアが4.82%で、蓼科エリアは各判別群の合計が13.26%と聖石遺跡よりもやや多い。長峯遺跡・聖石遺跡とともに、近隣の蓼科エリア原産地から持ち込まれた黒曜石は少量で、諏訪星ヶ台が圧倒的に優位である。この結果は、黒曜石原産地と集落の関係が、単に遺跡と原産地との距離だけではないことを、駒形遺跡と同様に指摘することができる。

以上、駒形遺跡および近隣遺跡の分析結果を時期ごとに示し、聖石遺跡・長峯遺跡の分析結果を含めて遺跡出土の黒曜石原産地比率と推移をまとめてみた。その結果、和田エリア、諏訪エリア、蓼科エリアの黒曜石比率は、各時期を通して諏訪エリアの星ヶ台が最も多く、時期が下るに従い、星ヶ台の比率がさらに上昇して依存度が高まる、といった傾向が明らかになった。ただ、駒形遺跡の前期初頭～前葉と、前期末葉、中期中葉、後期中葉の分析試料数とは大きく異なるため、同等に比較してよいのか、前期末葉以降の結果を各時期の傾向と判断してよいのか、などの問題点はあるが、時期を通した形で黒曜石原産地比率の推移を提示できたことは、今後の黒曜石研究に寄与できる大きな成果といえる。

第7章 総括

地元医師の田実文朗氏によって黒曜石、石鉄などが収集されるなど、駒形遺跡は既に、大正時代には知られていた遺跡である。田実氏の収集品は、当時、『諏訪史』第一巻の執筆に携わった、鳥居龍藏氏が実見している。また、霧ヶ峰周辺や和田峠周辺の、黒曜石原産地に近い地理的環境に位置することから、駒形遺跡は「黒曜石の交易に関わった遺跡である」、「多量の黒曜石が持ち込まれて、石器製作を行った遺跡である」、などと評価されてきた。その評価は、平成6・8年に長野県教育委員会が実施した試掘・分布調査、平成12年に茅野市教育委員会が実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査などで裏付けられ、特に、分布・試掘調査の成果を受けた形で、平成10年、国史跡に指定されたのは周知のとおりである。

今回の発掘調査は、県道諏訪茅野線建設に伴うもので、調査地点は国史跡範囲の南側だが、原産地から黒曜石を持ち込み、石鉄などの石器製作を行った、縄文時代前期初頭～前葉集落の様相が明らかになった。その成果は、本文第1～6章で述べたところだが、最後に成果を総括しておきたい。

竪穴住居跡と方形柱穴列は同じ場所に建てられていた

今回、調査された前期初頭～前葉集落の位置は、集落範囲からすれば、縁辺に近いと思われる北側部分であり、主体は調査区の南側一帯に広がるものと推測される。しかし、縁辺とはいえ、竪穴住居跡、方形柱穴列、掘立柱建物跡、土坑、屋外炉など、様々な遺構が重複し、密度はかなり高い。こうした遺構の重複は、いくつかの段階に跨る集落変遷の結果と考えられる。

原村阿久遺跡は、南斜面に開口部をもつ馬蹄形の集落で（長野県教委1982）、方形柱穴列と竪穴住居跡は中央広場とその周辺部といった、それぞれ異なる場所に位置している。また、阿久尻遺跡（茅野市教委1993）は、A区では1基の方形柱穴列を中心として、その周辺に竪穴住居跡が回って位置し、B～C区では広い平坦面の内側を方形柱穴列が占め、その外側の北斜面や南斜面にかかる場所、台地先端に竪穴住居跡が位置する。阿久遺跡と阿久尻遺跡は、細部に違いはみられるものの、ともに集落のより中心部に方形柱穴列が、周辺部に竪穴住居跡が別れて位置するといった傾向がみられる。

それに対して、駒形遺跡では、竪穴住居跡と方形柱穴列は分布範囲が一致し、重複関係が認められるので、集落の同じ場所に建てられたといえる。方形柱穴列のみが、集落の中心部に纏まって分布するような状況はみられず、さらに、集落全体にわたって竪穴住居跡と方形柱穴列が同じ範囲に分布していた状況も想定される。こうした点から、駒形遺跡の集落構造は、阿久遺跡や阿久尻遺跡とは異なるものであったと推測することも可能であろう。駒形遺跡、阿久遺跡、阿久尻遺跡の方形柱穴列は、遺構からみる痕跡では、ともに明確な違いは指摘できない。しかし、集落における分布範囲・構築位置などの差異から、方形柱穴列の異なる機能・役割を推測することはできないだろうか。

今回の調査では、時期を限定できる遺構が少なく、集落変遷を示すことは控えた。遺構の時期を明確にしたうえで、各時期における竪穴住居跡と方形柱穴列、およびそのほかの遺構の分布位置や変遷を検討していくことが課題となる。

2つの集落が並存した可能性がある

駒形遺跡では、前期初頭～前葉の遺構は、今回の調査区のほかに、調査区北側の国史跡範囲でも検出されている。ところが、今回の調査では、県道本線への取り付け道路部分といった限られた面積ではあったが、調査区と国史跡との間に遺構・遺物は検出されなかった。もし、両地点の遺構に連続性がなければ、同時期に2つの集落が存在した、などの集落像を描く必要が生ずる。阿久尻遺跡では、ほぼ同時期と考え

られるA地区とB～C地区の、2つの集落の並存を認めており、そうした例は確かにみられる。国史跡範囲と今回の調査区の間には、本格的な調査事例がなく、実態は不明確だが、前期初頭～前葉集落の構造・性格などを理解するために重要な地点である。

在地系土器には4つの系統があり、6段階に変遷する

集落の時期と考えられる前期初頭～前葉土器は、前期初頭でⅠ・Ⅱの2段階、前期前葉でⅢ～Ⅵの4段階にわたる変遷が把握された。

前期初頭は、土器の一括性が保障されるような出土状況に恵まれなかったため、従来の研究成果を援用しつつ、型式学的な分類によって、塚田式と中道式の段階に細分した。塚田式は、早期末葉絡条体圧痕文土器群を母体に、また、中道式は塚田式の系統上にそれぞれ成立した土器型式と考え、早期末葉～前期初頭における在地系土器群の、系統的な繋がりと変遷を提示することができた。また、塚田式と同じように、口縁部へ隆帯文を貼付する「隆帯文土器」については、富士見町坂平遺跡の良好な出土事例のもと、「坂平式」を設定しようとする動きがあることを紹介した。「隆帯文土器」は、縄文・撚糸文の施文が全く認められない点で、塚田式とは異なる土器型式であり、「坂平式」の型式名で一括されることは必要と感じる。今後は、坂平式の系統性や下吉井式との差異などが課題となろう。

前期前葉では、中越式の頸部～口縁部にみられる器形の違いを、遺構の重複関係と土器出土状況の検討から時間差と理解し、中越式を古(Ⅲ)・中(Ⅳ)・新(Ⅴ)の3段階に変遷させ、中段階にはさらなる細分の可能性を示唆した。また、中越式の新段階に神ノ木式を並行させ、神ノ木式から有尾式への系統性を示すとともに、中越式の終末は有尾式の段階までは下らない可能性が高いと述べた。

前期初頭～前葉の在地系土器群は、1系統が連綿と変遷するのではなく、早期末葉の絡条体圧痕文土器群から繋がる塚田式～中道式、「坂平式」、中越式、神ノ木式～有尾式といった違う系統の土器が、それぞれの段階において、主体を成す状況が確認されたといえる。主体となる系統は、前期初頭では繊維を含む羽状細文尖底土器(塚田式・中道式)であったものが、前期前葉では無繊維で指頭圧痕をもち、無文を主とする土器(中越式)に変化するなど、斬新である。こうした様相は、茅野市高風呂遺跡や富士見町坂平遺跡でも認められ、八ヶ岳周辺における在地系土器群の、地域性を示す可能性が高い。

両極石器を素材とした石鏃製作が行われていた

剥片を素材とする石鏃製作工程とともに、第69号竪穴住居跡山土資料から、板状の両極石器を素材とする石鏃製作工程を推測した。両極石器を素材とする工程の存在について、黒曜石原石の大きさから、石鏃製作に必要な大きさの剥片を獲得するのが困難であった、あるいは両極石器を素材としたほうが効率的であった、などの理由を考えてみた。

今回の整理作業では行えなかったが、剥片類の観察を行い、板状の両極石器を素材とする工程によって生じたと推測される剥片類を抽出するなどして、工程を裏付けするような資料を補強していくことが、今後の課題といえる。両極石器を素材とする、石鏃製作工程が体系的に実証されれば、例えば、①原石、②板状の両極石器、③石鏃未製品、④石鏃(製品)の有無を確認することで、その遺跡で石鏃製作が行われたのか、①～④のどの工程から製作が行われたのか、②がほかの遺跡から持ち込まれ、③以降の工程をその遺跡で行った可能性はないか、などの検討が可能になろう。

河原喜重子氏は、岡谷市目切遺跡(縄文時代中期初頭)から出土した資料をもとに、石鏃製作工程を考察し(河原2006)、石鏃の素材は「原石から獲得した素材剥片」であったとの見解を示す。この場合、石鏃の素材剥片を得るためには、原石はどれ位の大きさを必要としたのか。上記のように、駒形遺跡へ持ち込まれた黒曜石原石が、石鏃の素材剥片を獲得するに不都合であったとする推測が正しければ、目切遺跡の黒曜石原石は、駒形遺跡よりも大形であったとみることが出来る。また、宮坂清氏によれば、原産地

にみられる黒曜石原石は、大形のもの少なく、駒形遺跡の原石に近い大きさであるという。掘って、あくまでも推測の域を出ないが、目切遺跡と駒形遺跡へ持ち込まれた黒曜石原石は原産地が異なり、原石の大きさに見合った方法・技術で石器製作が行われた可能性を考えておきたい。

「諏訪星ヶ台産」の黒曜石が最も多く持ち込まれている

今回実施した 8,195 点の産地同定分析は、駒形遺跡と黒曜石原産地の関係およびその推移が、ある程度の時期を通じた形で把握された点で大きな成果といえよう。

駒形遺跡に持ち込まれた黒曜石で最も多いのは、諏訪星ヶ台産と分析されたものであった。黒曜石原石には、長さ 10 cm を超えるものはほとんどみられず、長さ 5～7 cm 大になると一定量が認められ、長さ 5 cm 大以下のものが最も多いといった、大きさの特徴と、表皮に黄褐色粒子を含むもの、赤色が混じるもの、白色が混じるもの、より黒色のものなどといった顔つきの特徴がみられた。そして、黒曜石原石の形状が塊状で、稜が潰れ鋭いものではない点から、黒曜石の採取地点を推定するにあたり、その候補として岩脈（第 1 次産地）から直接採取されたのではなく、転石（第 2 次産地）などを採取したことが推測された。

高坂清・守矢昌文両氏によれば、駒形遺跡と同時期の集落が検出された下諏訪町武居遺跡、茅野市高風呂遺跡、広井出遺跡出土の黒曜石原石は、駒形遺跡と大きさ、顔つきなどの特徴が非常に類似し、肉眼観察からではあるが、駒形遺跡やこれらの遺跡で出土した黒曜石原石は、同じ場所で採集された可能性が高いという。その可能性に従うならば、駒形遺跡や高風呂遺跡、広井出遺跡、武居遺跡といった、茅野市・下諏訪町周辺の前期初頭～前葉集落には、「諏訪星ヶ台」の同じ場所で採取された黒曜石が、最も多く持ち込まれた可能性が高いと推測されよう。

産地同定分析結果の諏訪星ヶ台とは、1 地点ではなく、分析結果で示された諏訪エリア一帯に位置する、複数地点の黒曜石原産地を一括している。望月明彦氏が行う蛍光 X 線分析では、諏訪エリアから産出する複数地点の黒曜石は、分析データ上、地点ごとの差異が認められず、同一の纏まりとして捉えられるという。従って、例えば、学史において著名な星ヶ塔黒曜石原産地も、諏訪エリアの星ヶ台産として一括されているものと思われる。さて、駒形遺跡や周辺遺跡の前期初頭～前葉集落に持ち込まれた黒曜石原石は、分析結果でいうところの諏訪エリア、あるいは諏訪星ヶ台の、どの地点から持ち込まれた原石なのか。ある 1 地点の原石なのか、複数地点の原石なのか。もし、原産地各地点の黒曜石に対して、大きさ、顔つきなどの肉眼観察を行い、地点ごとの特徴が把握できれば、集落遺跡出土の黒曜石を原産地と比較することで、採取地点をより絞り込んだ形で推測することが可能といえまいか。

駒形遺跡から、星ヶ塔・星ヶ台黒曜石原産地へと至るルートは、これまでも推定され、距離的には日帰り行程も充分可能であったと思われる。しかし、星ヶ台原産地は東俣川流域に、星ヶ塔原産地は砥川流域に位置し、東俣川は砥川と合流して中山道沿いを下り、岡谷市および下諏訪町方面へと至る。さらに、砥川の対岸は和田峠の黒曜石原産地であり、星ヶ塔と和田峠の黒曜石原産地は対峙する位置にある。流域からみれば、駒形遺跡は星ヶ塔・星ヶ台原産地、さらには和田峠の原産地が位置する砥川、東俣川流域からは本来外れた場所に位置している。そうした場所に、「黒曜石の交易」や「黒曜石の石器製作」に関わった駒形遺跡が位置することに、駒形遺跡の本質が見え隠れする。

黒曜石を運ぶ、交易ルート上に位置したと評価された駒形遺跡は、現在、県道諏訪茅野線が開通したことによって、霧ヶ峰などへ観光客を運ぶルートへと変貌した。今回の調査区および国史跡周辺には、多数の遺構が残存している。国史跡範囲に限らず、こうした遺跡に対して、的確な保護措置が計られて行く必要がある。遺跡周辺に残る、良好な自然環境とともに、将来を見通した保護活用計画を立案・実践していくことが望まれる。

参考・引用文献一覧

- 大竹幸恵 2004 『黒曜石の原産地を探る 鷹山遺跡群』 シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊1 新泉社
- 大竹憲昭 2001 『関東、東北地方への黒曜石供給拠点かー茅野市・駒形遺跡』 『古代への旅にかけよう 長野県の遺跡探検』 長野県埋蔵文化財センター
- 岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡』
- 岡谷市教育委員会 2005 『日切・清水田遺跡 岡谷市長地山の手区画整理事業に伴う発掘調査報告書』
- 河原喜重子 2005 『Ⅱ. 石器の素材と製作』 『日切・清水田遺跡』 岡谷市教育委員会
- 児玉卓文 1984 『長門町中道一長野県小県郡長門町中道遺跡緊急発掘調査報告書一』
- 渋谷昌彦 1982 『木島式土器の研究一木島式土器の型式細分について一』 『静岡県考古学研究会』 11 静岡県考古学会
- 渋谷昌彦 1983 『神之木台・下吉井式土器の研究一その型式内容と編年の位置について一』 『小田原考古学研究会会報』 11 小田原考古学研究会
- 渋谷昌彦 1991 『中越式土器の研究一中越遺跡、阿久遺跡出土土器を中心として』 『縄文時代』 2 縄文時代文化研究会
- 渋谷昌彦 2006 『板平式土器の設定』 『長野県考古学会誌』 118 長野県考古学会
- 下諏訪町教育委員会 1997 『武岡遺跡一長野県諏訪郡下諏訪町武岡遺跡発掘調査報告書一』
- 下平博行 1994 『塚田式』の設定とその様相について 『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
- 下平博行・費田明 1994 『長野県における縄文前期初頭縄文系土器群の編年』 『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』
- 縄文セミナーの会 1997 『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』
- 縄文セミナーの会 2000 『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』
- 縄文セミナーの会 2006 『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』
- 諏訪考古学研究会 2005 『第17回諏訪地区遺跡調査研究発表会』
- 諏訪教育会 1975 『諏訪の自然誌』 地質篇
- 諏訪史談会 1959 『諏訪史談要項』 19 茅野市米沢篇
- 諏訪市博物館 2003 『片倉館所蔵考古資料』
- 谷藤保彦 1988 『二ツ木式土器』 『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 1994 『花積下層Ⅰ式土器とその周辺』 『縄文土器論集一縄文セミナー 10周年記念論文集一』 縄文セミナーの会
- 谷藤保彦 2006 『周辺地域における塚田式土器』 『長野県考古学会』 118 長野県考古学会
- 茅野市 1986 『茅野市史』 上巻
- 茅野市教育委員会 1970 『茅野和出遺跡』
- 茅野市教育委員会 1978 『よせの台遺跡一埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一』
- 茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』
- 茅野市教育委員会 1990 『芥沢遺跡』
- 茅野市教育委員会 1990 『棚畑』
- 茅野市教育委員会 1991 『阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって 研究会資料』
- 茅野市教育委員会 1993 『阿久尻遺跡』
- 茅野市教育委員会 1993 『天狗山遺跡』
- 茅野市教育委員会 1995 『広井山遺跡』
- 茅野市教育委員会 1997 『神ノ木遺跡』
- 茅野市教育委員会 2000 『茅野市遺跡台帳』
- 茅野市教育委員会 2001 『大根遺跡』
- 茅野市教育委員会 2001 『一ノ瀬・芝ノ木遺跡』
- 茅野市教育委員会 2002 『大六遺跡 駒形遺跡』
- 茅野市教育委員会 2003 『中ツ原遺跡』
- 茅野市教育委員会 2004 『駒形遺跡埋蔵文化財試掘報告書』
- 寺崎裕助 1999 『第2節 第3項 前期』 『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編
- 長門町教育委員会 1999 『鷹山遺跡群』 Ⅲ
- 長野県教育委員会 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一原村その5一』

- 長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業地内遺跡一遺跡詳細分布調査報告書一』
- 長野県考古学会 2003 『2003年度秋季大会 中部高地に開花した中越文化』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『聖石遺跡 長峯遺跡』
- 中沢道彦 1994 「早期第IV群第2類土器について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 中沢道彦 1997 「縄文時代早期末「磨礮B式」の設定と「ブレ塚田式」の理解に向けて」『川原田遺跡 縄文編』御代田町教育委員会
- 齋田 明 1994 「前期初頭の土器群について」『下弥堂遺跡』御代田町教育委員会
- 齋田 明 2000 「小諸市郷土遺跡出土の縄文早期末葉土器群」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
- 白州町教育委員会 1993 『上北田遺跡』
- 富士川町教育委員会 1981 『木島一静岡県富士川町木島遺跡第4次調査報告書一』
- 富士見町教育委員会 2004 『坂平一八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』
- 松本市教育委員会 1990 『埴ノ内遺跡』
- 宮田村教育委員会 1990 『中越遺跡発掘調査報告書』
- 宮坂虎次 1983 「駒形遺跡 茅野市米沢北大塚」『長野県史』考古資料編 全一卷(二)主要遺跡(南信)長野県史刊行会
- 宮坂英一 1961 「縄文早期終末の住居址一茅野市駒形遺跡山土一」『信濃』13-8 信濃史学会
- 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』
- 御代田町教育委員会 1994 『塚田遺跡』
- 百瀬忠幸 1998 「磨礮B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』1 長野県埋蔵文化財センター
- 山下勝年 1976 『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会
- 米沢考古学クラブ 1973 「古道 霧ヶ峰南部における先史時代の黒曜石運搬ルートと考えられる古道の調査』
- 綿田弘夫 1993 「向六工遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』12 長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘夫 1996 「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研究紀要』2 長野県立歴史館



②・④区 遺構分布状況（北側から）



S B 39～42・54 遺構分布状況（南側から）



SB 37 完掘 (南側から)



SB 37 礫出土状況 (西側から)



SB 37 石皿出土状況 (南側から)



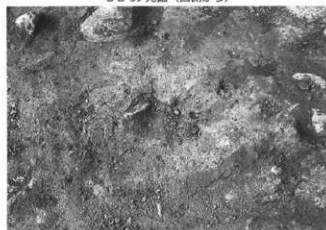
SB 38 完掘 (西側から)



SB 39 完掘 (西側から)



SB 39 礫出土状況 (東側から)



SB 39 炉 (南側から)



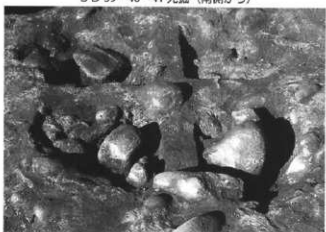
SB 40・41 完掘 (南側から)



SB 39・40・41 完掘 (南側から)



SB 44 完掘 (東側から)



SB 44 伊断面 (東側から)



SB 42 完掘 (西側から)



SB 42 石回炉 (東側から)



SB 42 礎出土状況 (南側から)



SB 42 石皿出土状況 (西側から)



SB 45 断面 (北側から)



SB 46 完掘 (真上から)



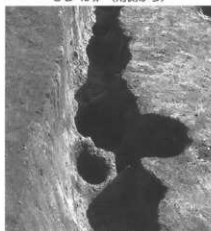
SB 46 炉 (南側から)



SB 46 炉 (南側から)



SB 46 炉 (新・旧)



SB 46 北壁柱穴 (西側から)



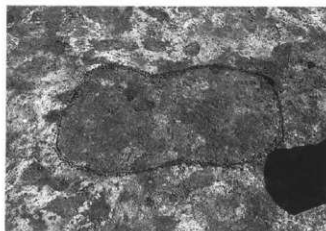
SB 47 炉 (西側から)



SB 47 完掘 (東側から)



SB 48 完掘 (北側から)



SB 48 炉検出 (西側から)



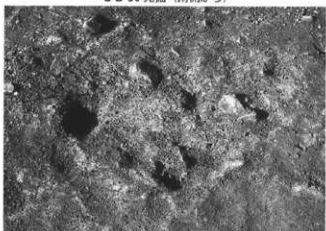
SB 49 完掘 (東側から)



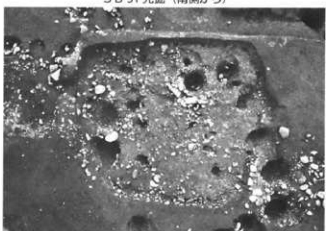
SB 50 完掘 (南側から)



SB 51 完掘 (南側から)



SB 51 炉完掘 (東側から)



SB 53 完掘 (真上から)



SB 53 遺物出土状況 (南側から)



SB 54 完掘 (南側から)



SB 54 礫・遺物出土状況 (南側から)



SB 54 遺物出土状況 (南側から)



SB 54 遺物出土状況 (北西側から)



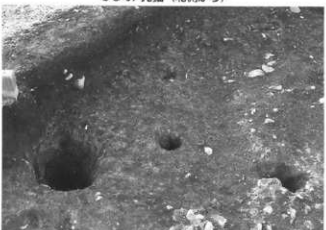
SB 56 完掘状況 (南側から)



SB 57 完掘 (北側から)



SB 57 石囲炉 (東側から)



SB 58 完掘 (東側から)



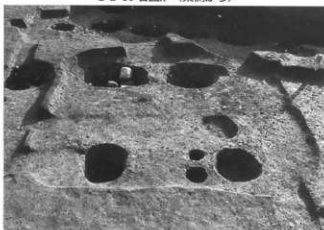
SB 60 完掘 (東側から)



SB 60 石囲炉 (東側から)



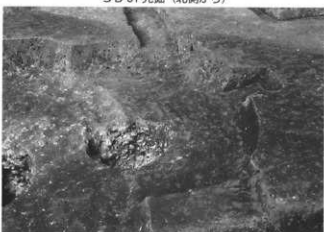
SB 61・62 完掘 (北側から)



SB 61 完掘 (北側から)



SB 64 完掘 (東側から)



SB 65 完掘 (南側から)



SB 66 石皿・礎出土状況 (南側から)



SB 66 土器出土状況 (北側から)



SB 66 石皿・礎出土状況 (東側から)



SB 66 南西コーナーの礎 (北側から)



SB 67 完掘 (西側から)



SB 67 石囲炉 (南側から)



SB 67 北壁の礎 (南側から)



SB 67 土器出土状況 (北側から)



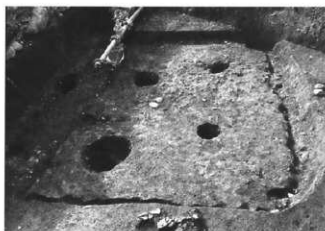
SB 69 完掘 (東側から)



SB 69 遺物出土状況 (西側から)



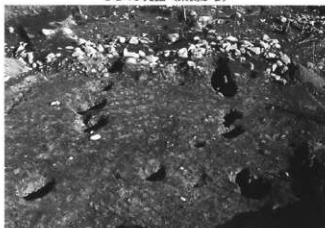
SB 70 完掘 (南側から)



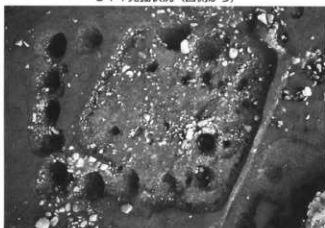
SB 73 完掘 (東側から)



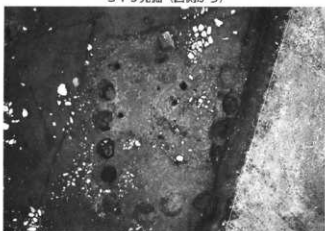
ST 1 完掘状況 (西側から)



ST 5 完掘 (西側から)



ST 4 完掘 (真上から)



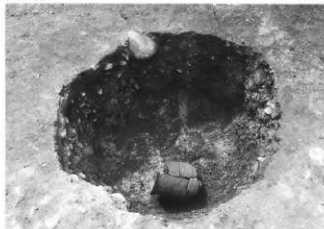
ST 2 完掘 (真上から)



ST 2 Pit 5 完掘



ST 6 完掘 (西側から)



ST 6 Pit 4 土器出土状況 (北側から)



ST 7 完掘 (東側から)



ST 8完掘 (東側から)



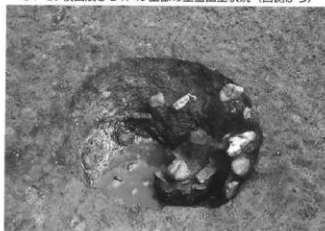
SF 20とSK 40 (西側から)



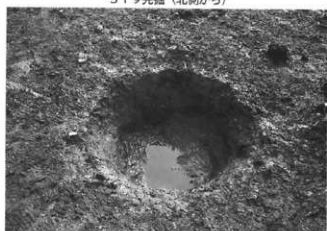
SF 20 検出及びSK 40 上部の土器出土状況 (西側から)



SK 9完掘 (北側から)



SK 1 遺物出土状況 (南側から)



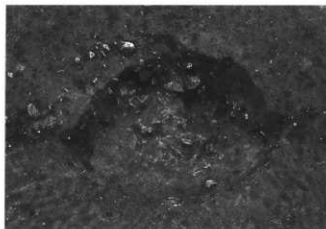
SK 2完掘 (南東側から)



SK 5 断面



SK 2 礎出土状況 (南側から)



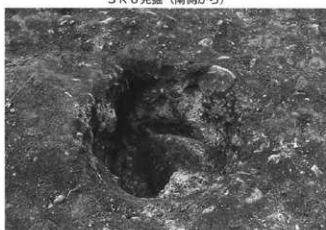
SK 7完掘 (北側から)



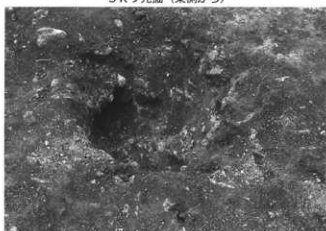
SK 8完掘 (南側から)



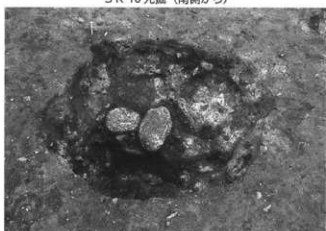
SK 9完掘 (東側から)



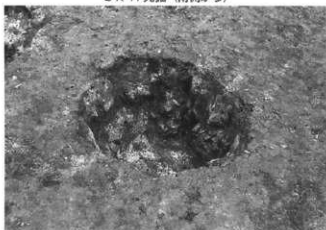
SK 10完掘 (南側から)



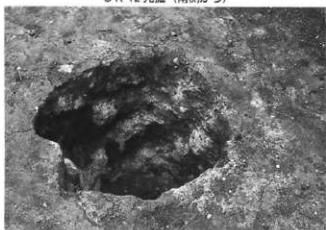
SK 11完掘 (南側から)



SK 12完掘 (南側から)



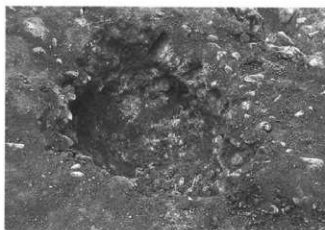
SK 13完掘 (西側から)



SK 14完掘 (南側から)



SK 15 完掘 (西側から)



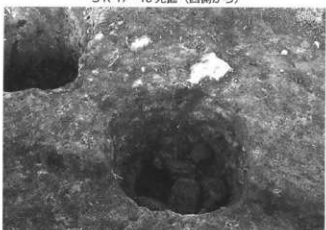
SK 16 完掘 (南側から)



SK 17・18 完掘 (西側から)



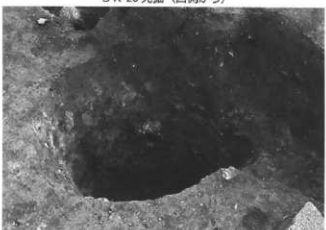
SK 19 完掘 (西側から)



SK 20 完掘 (西側から)



SK 21 完掘 (北側から)



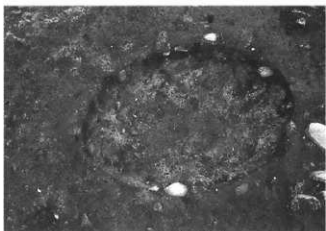
SK 22 完掘 (北側から)



IR 13 SK 完掘 (南側から)



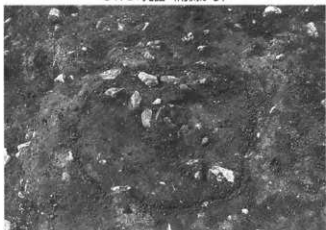
SK 23 完掘 (南側から)



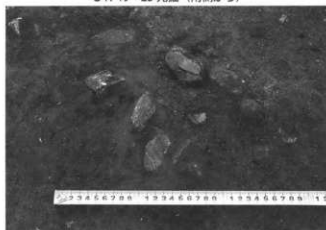
SK 24 完掘 (南側から)



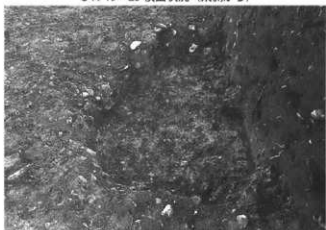
SK 19・25 完掘 (南側から)



SK 19・25 検出状況 (東側から)



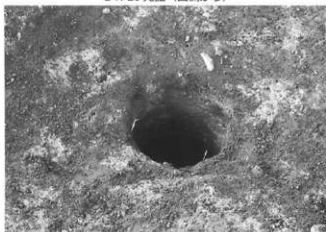
SK 25 黒曜石出土状況 (東側から)



SK 26 完掘 (西側から)



SK 28 完掘 (東側から)



SK 30 完掘 (東側から)



SK 31・32 完掘 (南側から)



SK 34 検出状況 (南側から)



SK 44 土器出土状況 (南側から)



SK 44 土器出土状況 (西側から)



NR 1 完掘 (南東側から)



NR 2 完掘



NR 3 完掘 (南西側から)



SF 19 周辺 (東側から)



SF 19 完掘 (東側から)



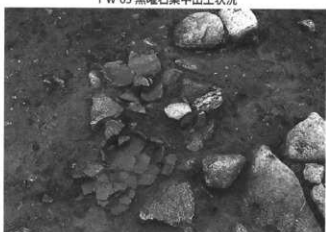
IW 03 黒曜石集中出土状況



IW 03 黒曜石集中出土状況



IW 03 黒曜石集中出土状況



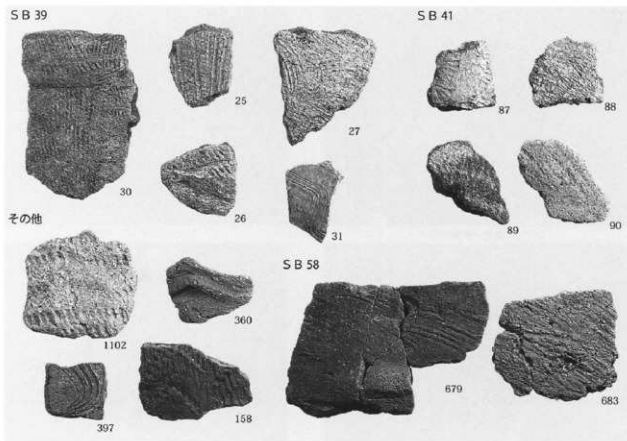
IW 04 - 14 土器出土状況



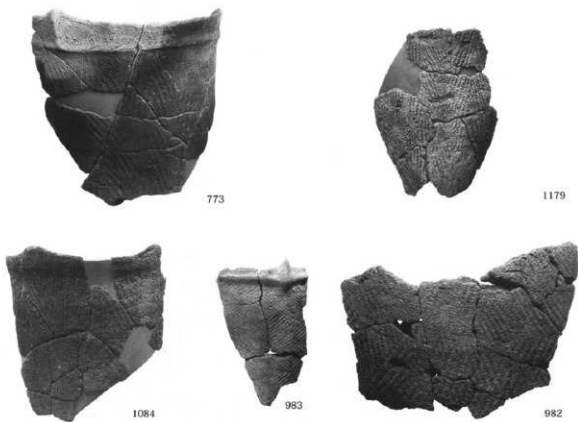
IW 03 遺物出土状況



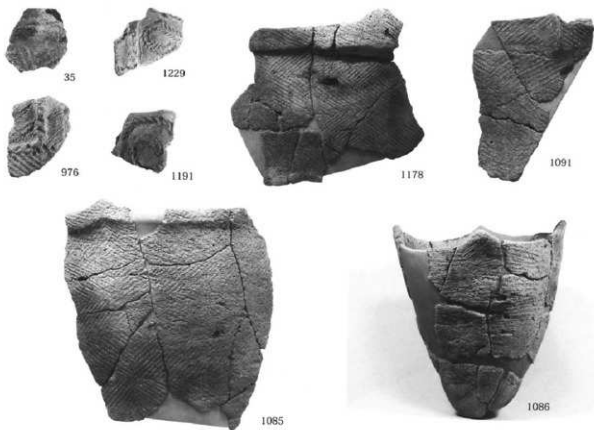
IW 04 - 14 夾耳飾出土状況



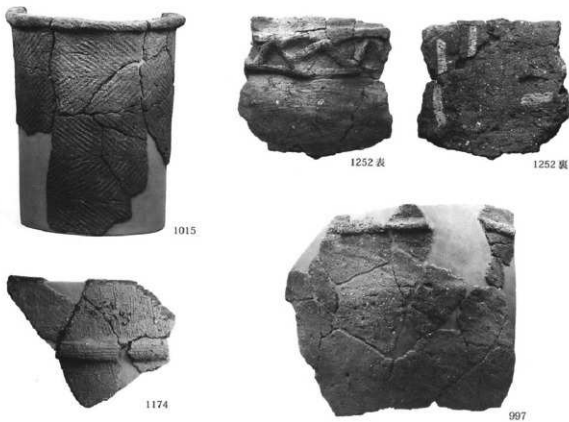
第II群 早期末葉土器群



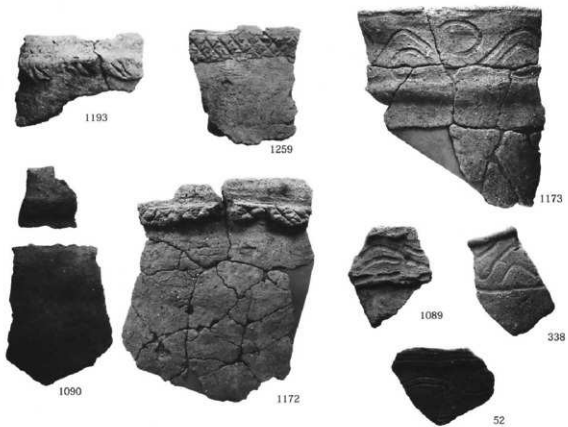
第III群 前期初頭土器群(1)



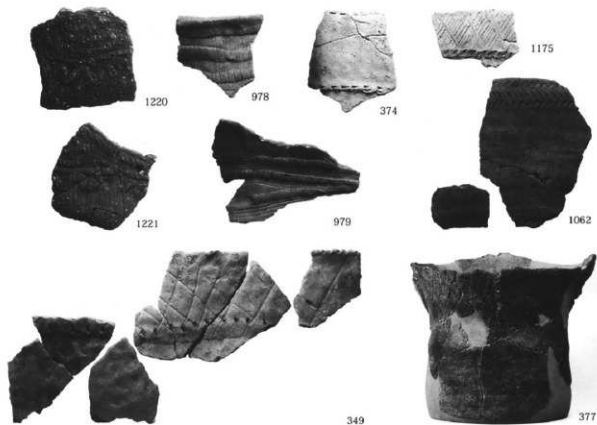
第III群 前期初頭土器群 (2)



第III群 前期初頭土器群 (3)



第III群 前期初頭土器群(4)



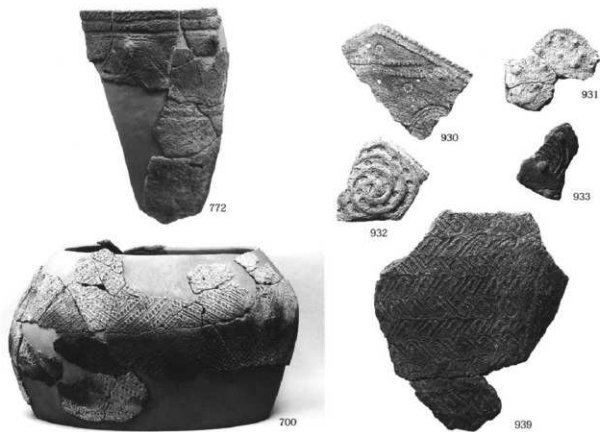
第III・IV群 前期初頭(5)・前期前葉土器群(1)



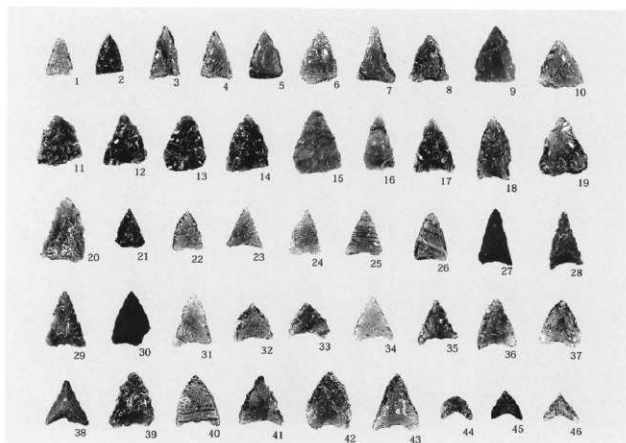
第IV群 前期前葉土器群 (2)



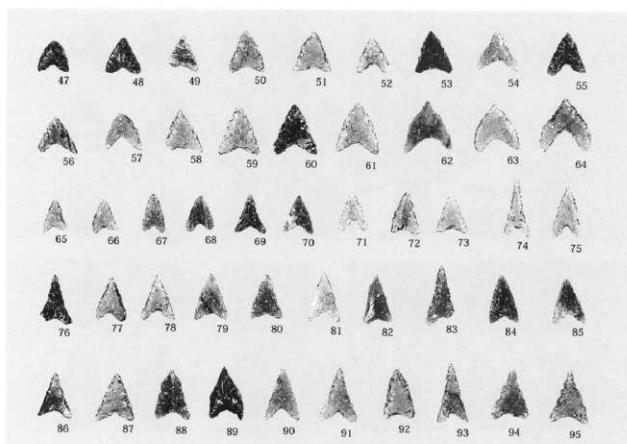
第IV群 前期前葉土器群 (3)



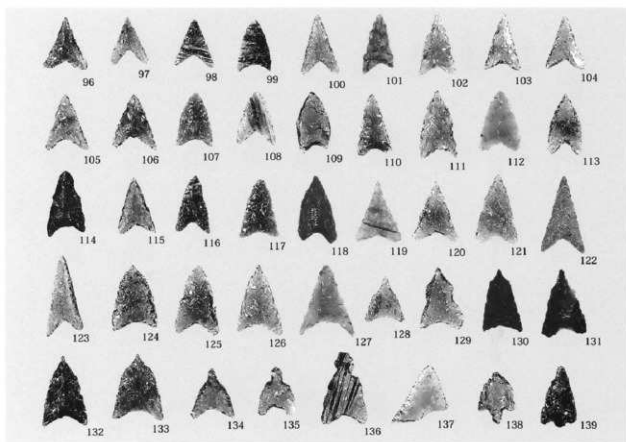
第IV群 前期前葉土器群 (4)



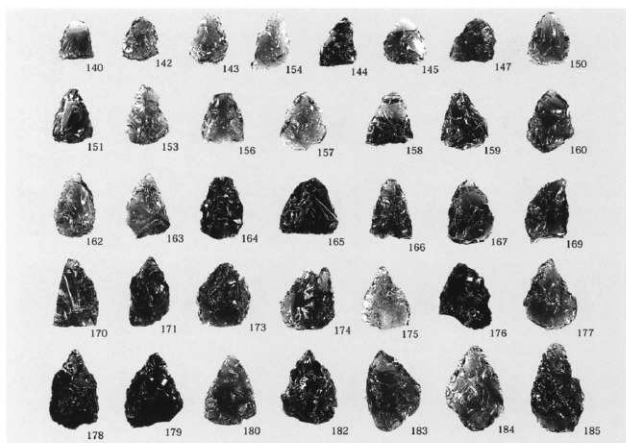
前期初頭～前葉石器 石鏃 (1)



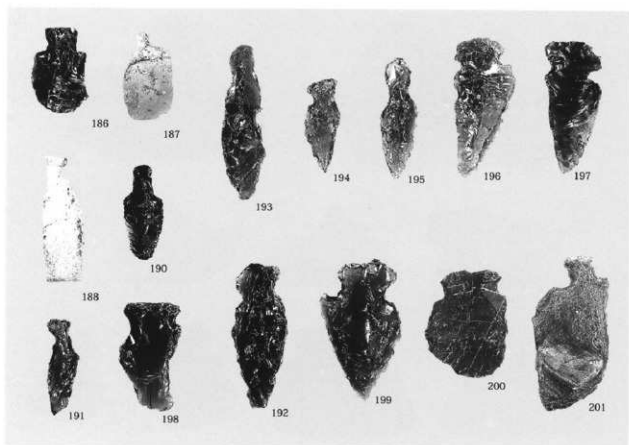
前期初頭～前葉石器 石鏃 (2)



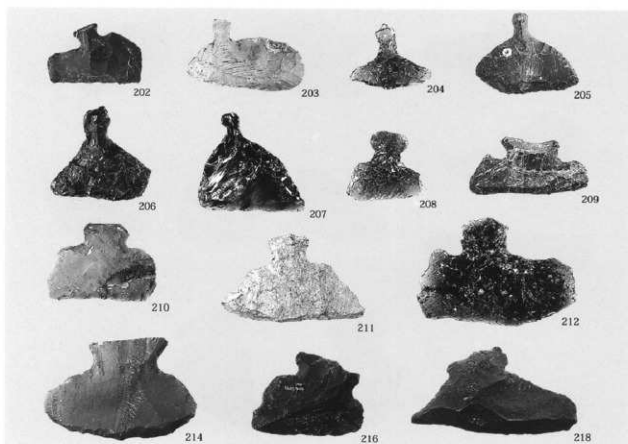
前期初頭～前葉石器 石鏃 (3)



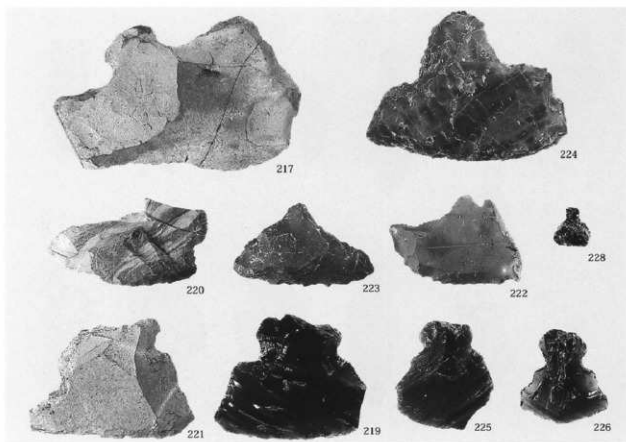
前期初頭～前葉石器 石鏃未製品



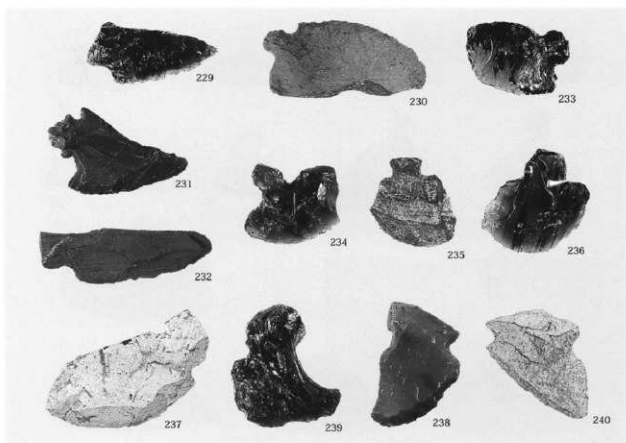
前期初頭～前葉石器 石匙 (1)



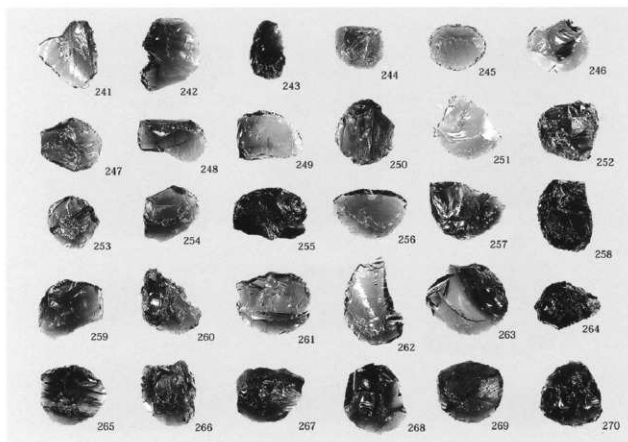
前期初頭～前葉石器 石匙 (2)



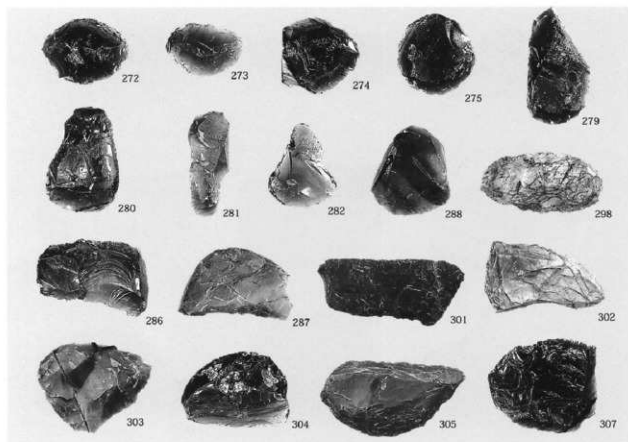
前期初頭～前葉石器 石匙 (3)



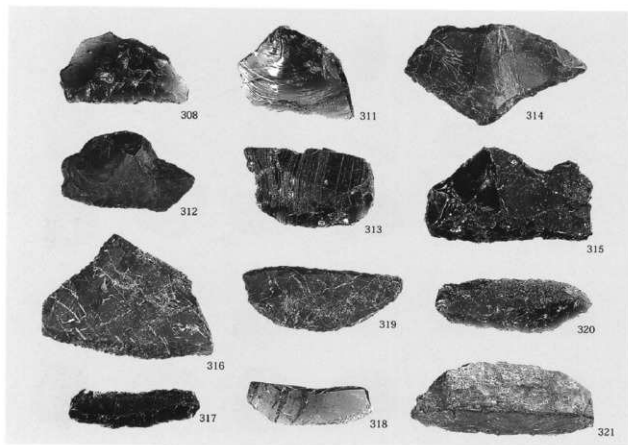
前期初頭～前葉石器 石匙 (4)



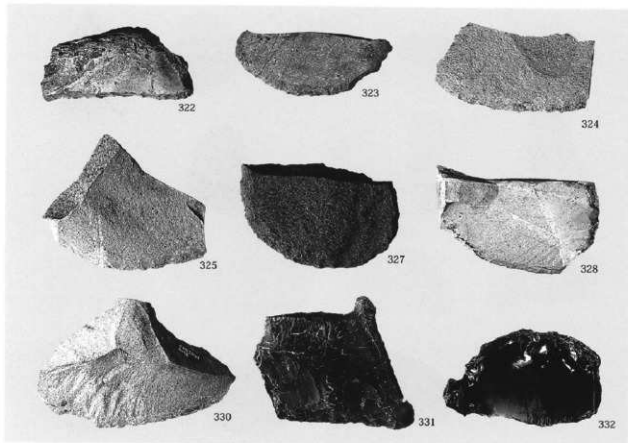
前期初頭～前葉石器 スクレイパー (1)



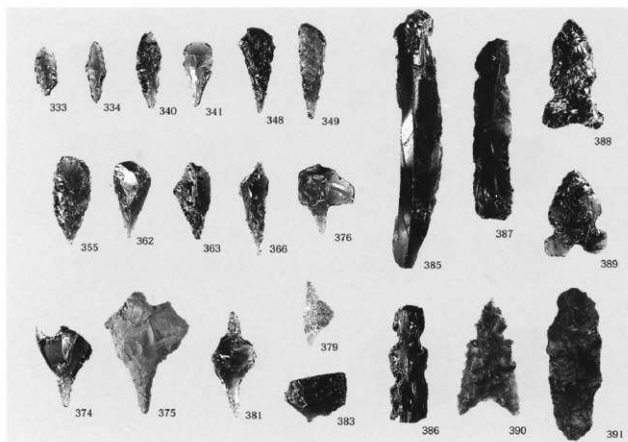
前期初頭～前葉石器 スクレイパー (2)



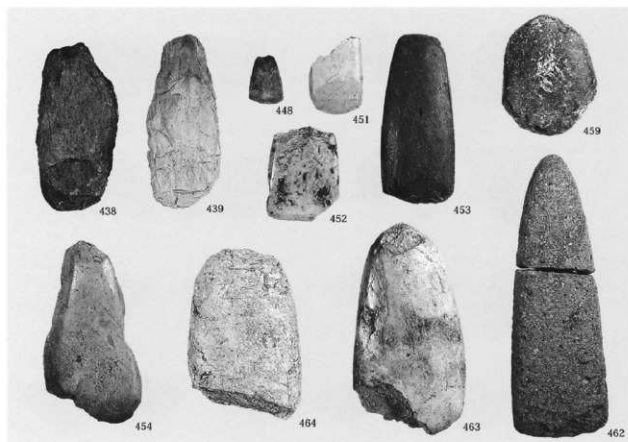
前期初頭～前葉石器 スクレイパー (3)



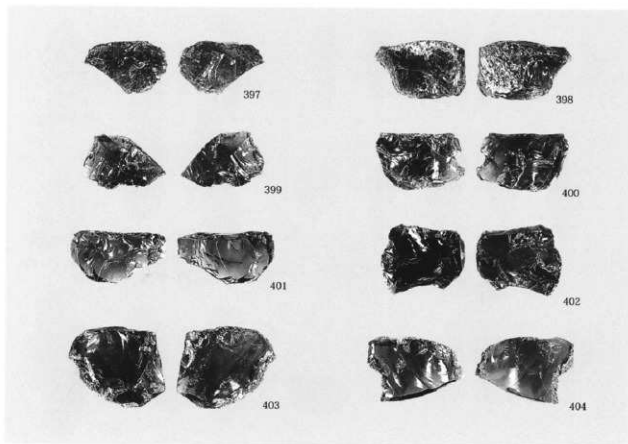
前期初頭～前葉石器 スクレイパー (4)



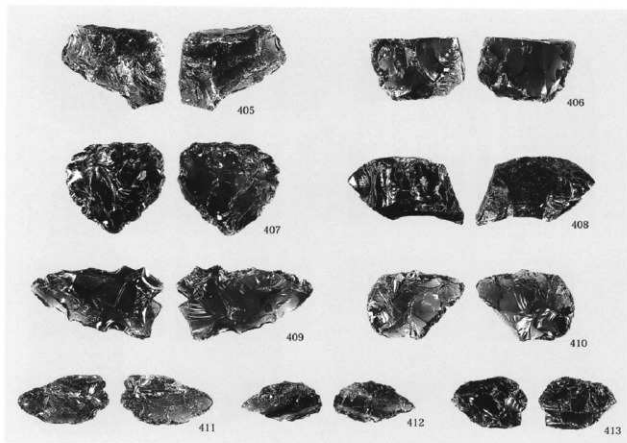
前期初頭～前葉石器 石錐・器種不明



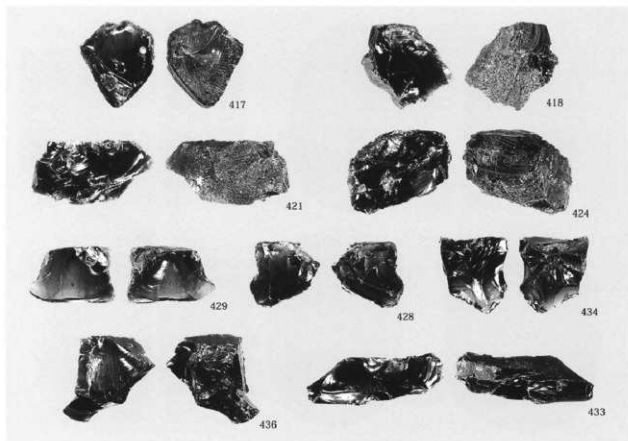
前期初頭～前葉石器 打製石斧・磨製石斧



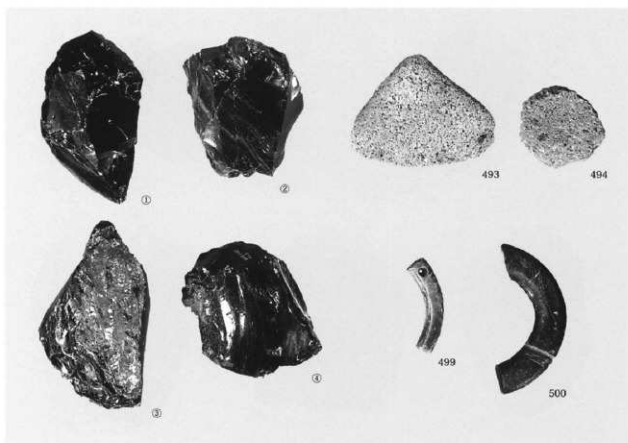
前期初頭～前葉石器 両極石器 (1)



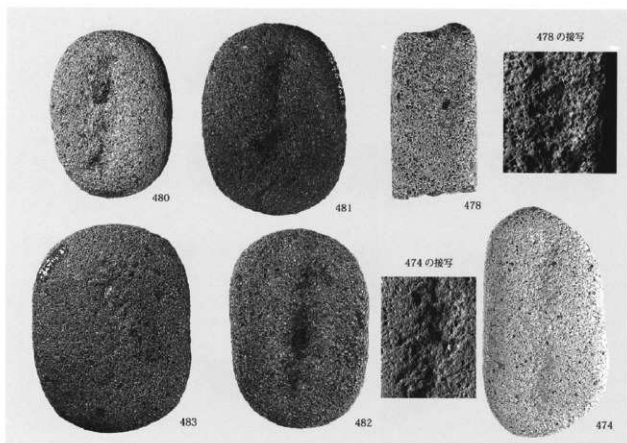
前期初頭～前葉石器 両極石器 (2)



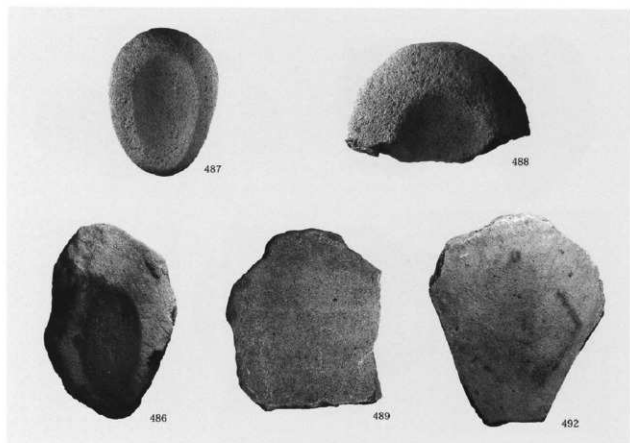
前期初頭～前葉石器 石核



前期初頭～前葉石器 原石・挾状耳飾ほか



前期初頭～前葉石器 凹石類



前期初頭～前葉石器 石皿

報告書抄録

ふりがな	けんどうすわちのせんけんせつじぎょう まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	駒形遺跡
巻次	茅野市内
シリーズ名 番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 82
編著者氏名	小林秀行 費田 明
編集 発行機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel: 026-293-5926
発行年月日	2007年(平成19年)3月27日

所収遺跡名	所在地		コード	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査 原因
	市町村	遺跡番号						
駒形遺跡 <small>とまがたいまき</small>	長野県 茅野市 米沢 4969-2 ほか	34	20214	36°2'14"	138°11'15"	2004年 4月20日～ 12月22日 2005年 8月22日～ 12月2日	3300㎡	県道諏訪茅野線建設に伴う事前調査

所収遺跡名	立 地	種 別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒形遺跡	霧ヶ峰南麓の 検沢川流域に 形成された、 扇状地状地形 に立地する	集落遺跡	縄文時代 前期初頭 ～前葉 中 世	竪穴住居址 37 軒 掘立柱建物跡 2 棟 方形柱穴列 8 棟 土坑 43 基 屋外炉 20 基 黒曜石集積遺構 1 基 配石遺構 1 基 流路跡 2 条 土坑 2 基 流路跡 1 条	前期初頭～ 前葉土器 石器 黒曜石 石器製作工程 に関する資料 カワラケ 陶磁器類	黒曜石原産地 から原石を持 ち込み、石器 を主とする石 器製作に関わ った集落跡